

長野多イ谷遺跡

—高岡・福田地区ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—

福井谷遺跡 I



2023年3月
福崎町教育委員会

長野多イ谷遺跡

—高岡・福田地区ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—

福井谷遺跡 I

2023年3月

福崎町教育委員会

あ い さ つ

福崎町は古くから交通の要衝として栄え、周囲を豊かな山林に囲まれ、中央部を清流市川が流れています。その東西それぞれに市街地が形成されてきました。

平成 27 年度から高岡・福田地区は場整備事業に伴い、調査を実施してまいりました。このたび作成した本報告書は、市川西岸に位置する新たに確認された遺跡で、周辺に奈良時代の集落であることがわかりました。徐々に高岡・福田地区の状況が明らかになってきています。

このたび、平成 2 年度に実施した長野多イ谷遺跡の発掘調査成果をまとめ、報告書を刊行致しました。広くご活用いただき、みなさまにとって郷土の歴史・文化への理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり地元関係者をはじめ、多くの方々にご理解とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

令和 5 年 3 月

福崎町教育委員会
教育長 高橋 渉

例 言

1. 本書は高岡・福田地区は場整備事業に伴って調査を実施した兵庫県神崎郡高岡字多イ谷に所在する長野多イ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成 28 年度から試掘確認調査を実施し、令和 2 年度に本発掘調査を行った。調査は兵庫県中播磨県民センターの依頼を受けて福崎町教育委員会が実施した。
3. 経費は試掘確認調査については国庫補助金を充て、本発掘調査は事業主体者が負担し一部国庫補助金を充てた。
4. 本書に使用した方位は基本的に磁北で、標高は福崎町設定の基準点を使用している。
5. 令和 2 年度の発掘調査は有限会社松浦興業に、ドローン撮影と基準点測量は株式会社ジオテクノ関西に委託した。
6. 本書に掲載した図のうち遺跡位置図は福崎町発行の都市計画図（1/10,000）を、調査区配置図は福崎町都市計画図（1/1,000）を編集したものである。
7. 合わせて平成 11 年度のほ場整備事業に伴う福井谷遺跡の概要と一部の報告を掲載した。
8. 執筆編集は樋口・梶・福永・原井川・常陰の協力を得て渡辺が行った。
9. 本報告に係る図面、写真、遺物等は、福崎町教育委員会にて保管している。
10. 調査・整理作業において下記の方々にご助言・ご協力をいただいた。また、多くの方々や機関にご指導・ご協力をいただきました。感謝します。地元桜区の方々、調査に参加いただいた方々、工事関係者の皆様には感謝します。

本文目次

I はじめに

1 調査に至る経緯と経過	1
2 分布試掘確認調査の経過と結果	1
3 本発掘調査の経過	5
4 整理作業の経過	5
5 周辺の環境	5

II 調査結果

1 遺構	8
2 遺物	16
III おわりに	19
IV 福井谷遺跡の概要と一部の遺物	20

図 目 次

図 1 福崎町・長野多イ谷遺跡と福井谷遺跡の位置	2
図 2 試掘確認調査・本発掘調査位置図	3
図 3 試掘調査実測図	4
図 4 長野多イ谷遺跡の位置と周辺の遺跡	7
図 5 1区遺構実測図	8
図 6 1区平面図	9
図 7 1区土層断面図	10
図 8 2区平面図	11
図 9 2区土層断面図・遺構図	12
図 10 3区平面図・遺構図	13
図 11 出土遺物実測図(1)	14
図 12 出土遺物実測図(2)	15
図 13 福井谷遺跡の位置と周辺の遺跡	21
図 14 福井谷遺跡調査区平面図	22
図 15 福井谷遺跡出土遺物実測図(1)	24
図 16 福井谷遺跡出土遺物実測図(2)	25
図 17 福井谷遺跡出土遺物実測図(2)	26

I はじめに

1. 調査に至る経緯と経過

福崎町では高岡・福田地区においては場整備事業が計画された。事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である観音堂遺跡・宮ノ前遺跡・前田遺跡・林谷遺跡・狐塚遺跡が存在するが、それ以外の遺跡の存在も想定されたので、計画策定期階から埋蔵文化財取り扱いの協議がなされた。通常の進め方で事業用地内の分布調査を実施し、その結果などから試掘確認調査対象地を確定し試掘確認調査を行い、遺構面が保全されない部分について本発掘調査を実施することとした。

調査はすべて福崎町教育委員会が主体となって行った。進捗実施にあたっては、事業主体である兵庫県中播磨県民センター姫路土地改良センターならびに福崎町農林振興課・土地改良区・地元と協議しながら実施した。調査にあたっては多くの方々の協力を得ました。感謝いたします。

2. 分布試掘確認調査の経過と結果

分布調査は平成27年度から断続的に実施したが、当該地域の分布調査は平成28年2月から平成30年4月にかけて行った。福崎町作成の図（1,000分の1）を利用し、筆ごとに採集点数を数えた。分布調査成果に加えて地形も考慮して、遺跡範囲を囲った。調査は玉田誠司・樋口 碧・渡辺 昇・梶 智美が担当した。分布調査成果をもとに試掘確認調査を行った。平成28・29年度に5期に分けて調査を実施した。当該遺跡部分は北工区を対象とした平成28年度に行った。耕作物の都合で麦作部分は9月に行い、10月に稲作部分を行った。詳細は福崎町文化財調査報告15で報告しているので、参照戴きたい。

長野多イ谷遺跡部分だけを略記すると、163G～175Gが該当する。平成29年2月20日（月）と24日（金）の2日にわたりて試掘調査を実施した。166Gでしがらみと思われる杭列を、168Gと169Gで石組みの暗渠を、172Gでピット・溝を検出した。また、167Gと173G～175Gでも遺構面を確認した。172Gの層位は耕土・床土の下が地山である。163G～165Gの字猪ノ谷部分は洪水堆積が厚く地山は検出していない。163Gは床土下に盛土が認められた。166Gも盛土が確認されたが黄灰細砂（礫多く含む）の下で杭列を検出した。167Gも下層には洪水堆積層が続くが、地表下0.5mのところにぶい黄シルト質極細砂の長期間ではないが安定した遺構面を確認した。173G～175Gも色調は異なるが同様の堆積なので、それらの範囲を長野多イ谷遺跡として遺跡登録した。

平成28年度調査体制

調査主体	福崎町教育委員会
教 育 長	高寄十郎
社会教育課長	大塚久典
社会教育課副課長	福永知美
社会教育課主査	玉田誠司
社会教育課主事	樋口 碧
埋蔵文化財専門員	渡辺 昇
整 理 作 業 員	梶 智美
整 理 作 業 員	福永明子



調査風景

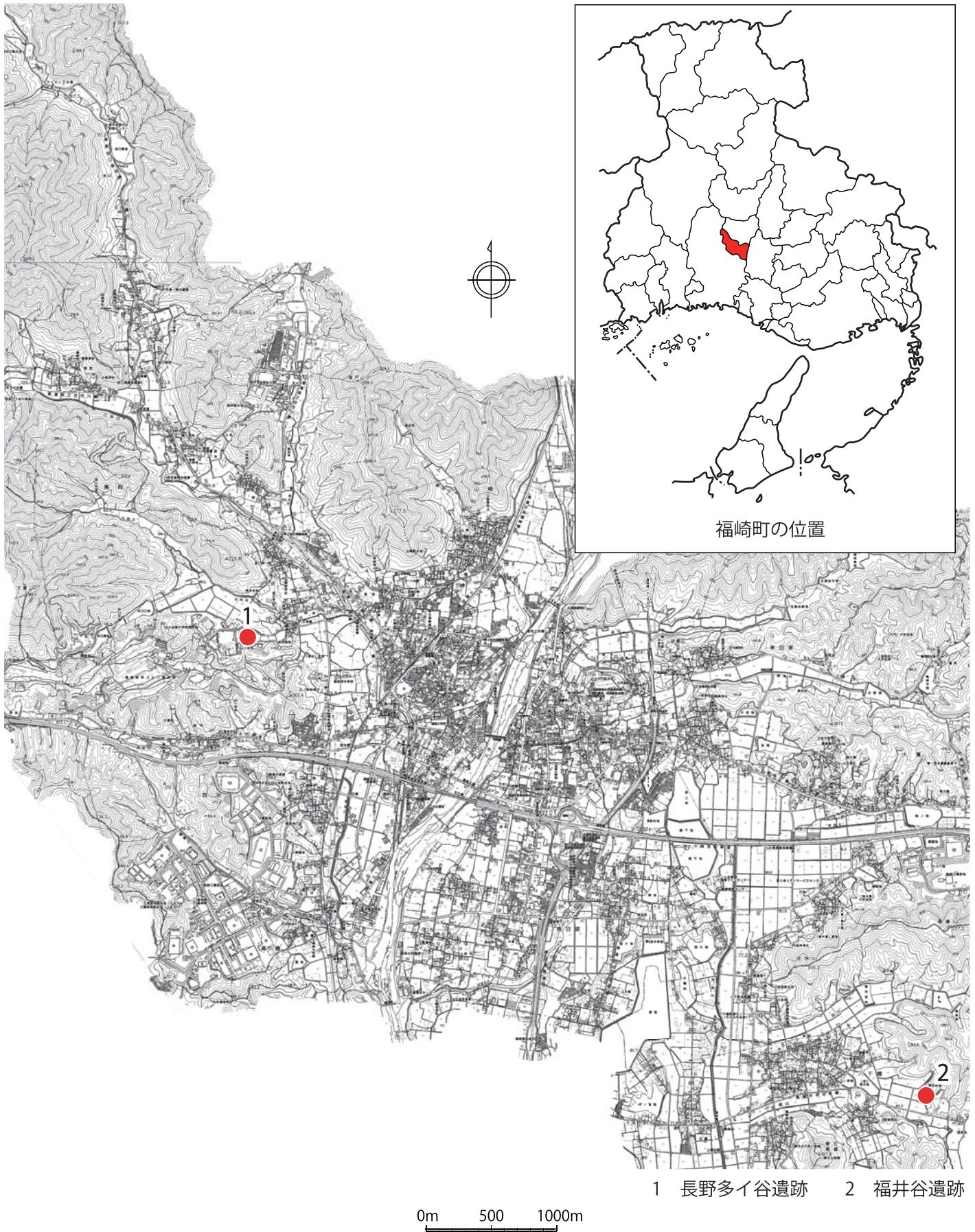
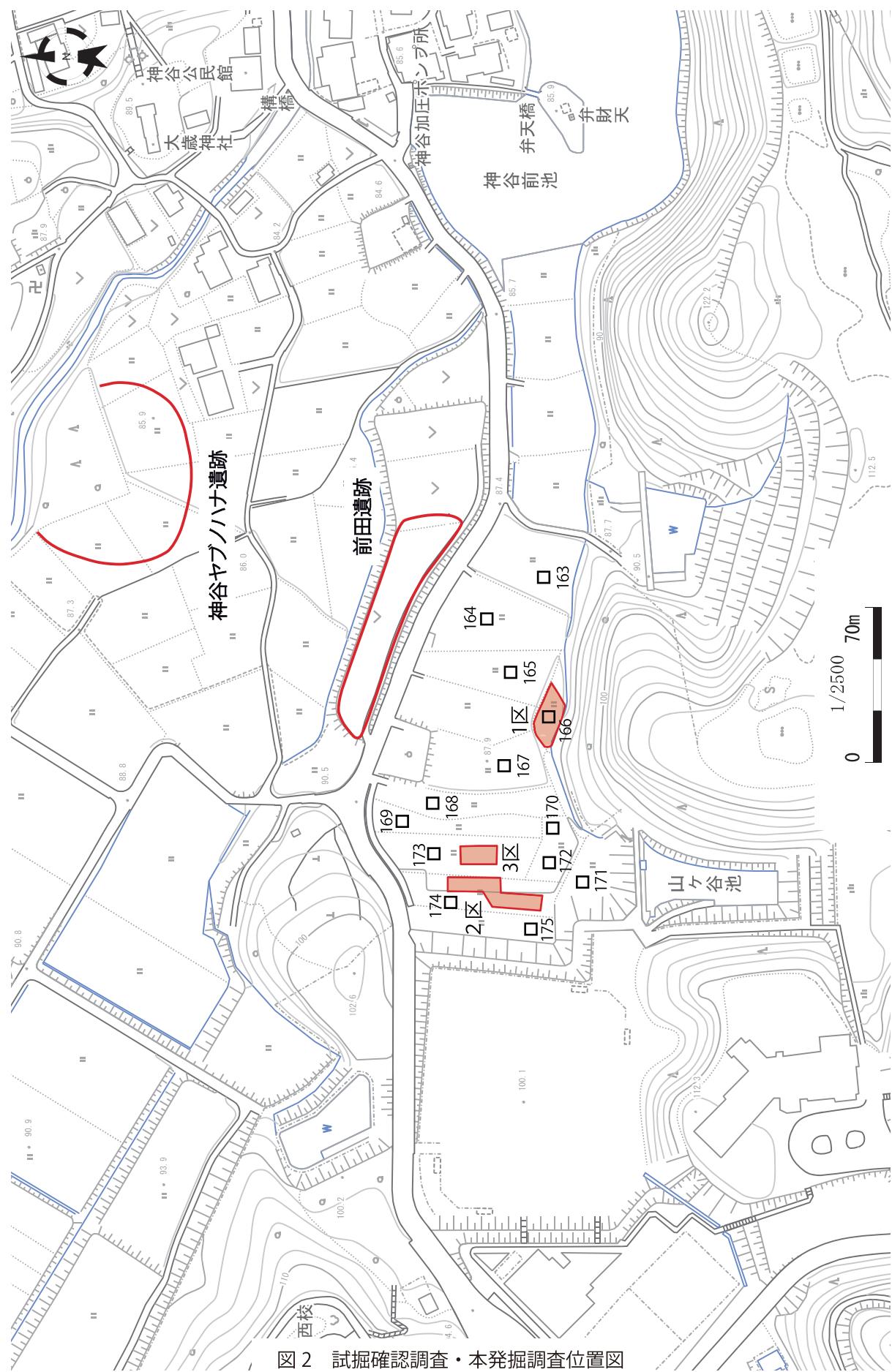
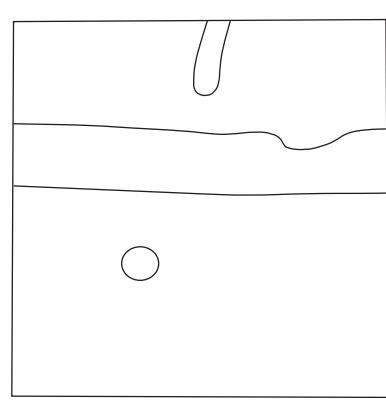
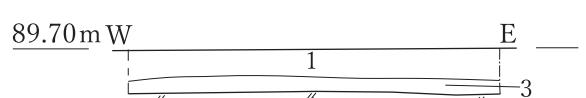
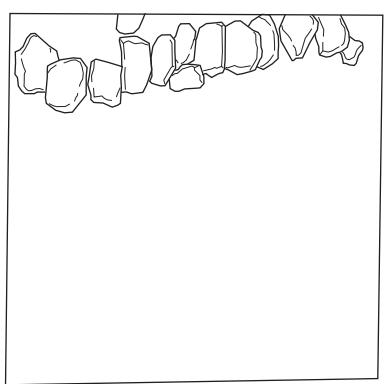
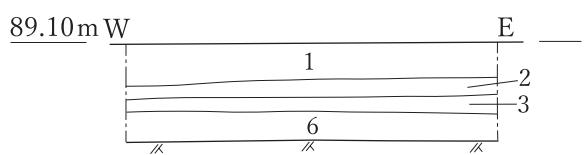
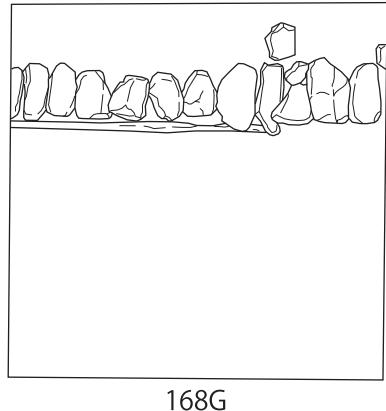
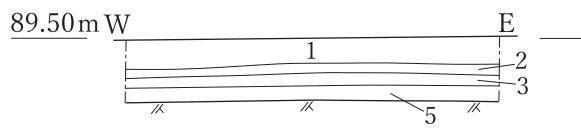


図1 福崎町と長野多イ谷遺跡・福井谷遺跡の位置





166G



168G



169G



172G

図3 試掘調査実測図

3. 本発掘調査の経過

調査の方法

調査対象地は耕作地だが、畑地・果樹栽培地・休耕地もあった。試掘確認調査の結果で調査範囲を決め、掘り下げは重機を用い、精査等においては人力により対応した。壁面の図化、写真撮影による記録を適宜行った。令和2年度は次年度も耕作を行う部分は埋め戻し作業も行った。耕作を行わない部分は安全面を考えて耕土以外の土を埋め戻した。

調査経過

試掘確認調査の結果、本調査が必要とされた地点について令和2年度に本発掘調査を実施することとなった。兵庫県中播磨県民センターと福崎町教育委員会で委託契約を交わした。発掘調査工事は有限会社松浦興業に、ドローン撮影と基準点測量は株式会社ジオテクノ関西に委託した。

令和2年度の調査は、令和2年12月3日～令和3年3月25日の間で実働32日間を費やして行った。調査面積は694m²である。年間を通して高岡・福田地区の調査を行う予定を組んでいたが、途中に別事業の調査を挟んだことから調査期間が長くなった。1区調査終了時に中断し、機械掘削は重複して実施した。ドローンと足場からの全景写真撮影・実測・断割り作業ののち、埋戻し作業も行い調査を終了した。現地説明会などは行えなかったが、後日速報展で紹介した。

令和2年度調査体制

調査主体	福崎町教育委員会
教 育 長	高橋 渉
社会教育課長	松田直彦
社会教育課副課長	森 公宏
社会教育課係長	藤原 元
社会教育課主査	長谷川幸子
社会教育課主査	樋口 碧
埋蔵文化財専門員	渡辺 昇
整 理 作 業 員	梶 智美
整 理 作 業 員	福永明子
整 理 作 業 員	原井川奈美
整 理 作 業 員	常陰ひとみ



調査風景

4. 整理作業の経過

試掘確認調査・本発掘調査と並行して隨時整理作業も実施した。土器洗浄や遺構図の調整などの作業は令和2年度に行ったが、それ以降の作業と報告書刊行は令和4年度に実施した。経費は発掘調査と合わせて兵庫県中播磨県民センターと委託契約を交わして実施した。

現地説明会は開催することが出来なかつたが、令和4年2月5日～4月10日に福崎町立神崎郡歴史民俗資料館にて開催された令和3年度企画展「令和2年度埋蔵文化財発掘速報展」で紹介し、遺物・写真パネルを展示し、解説会も行った。



展示風景

令和4年度調査体制

調査主体 福崎町教育委員会

教 育 長	高橋 渉	埋蔵文化財専門員	渡辺 昇
社会教育課長	木ノ本雅佳	整 理 作 業 員	梶 智美
社会教育課副課長	森 公宏	整 理 作 業 員	福永明子
社会教育課主査	長谷川幸子	整 理 作 業 員	原井川奈美
社会教育課主査	樋口 碧	整 理 作 業 員	常陰ひとみ

5. 周辺の環境

長野多イ谷遺跡は福崎町高岡字多イ谷に所在する。福崎町のほぼ中央を市川が南北に流れ、その両岸には市川に注ぐ支流が流れ開析された谷を形成している。南側には隔絶はないが、他の3方向は地形的に隔絶しており、旧香寺町など旧神崎郡南半を含んだ地域が盆地となっている。長野多イ谷遺跡は市川西岸に位置し、周辺の山塊は地質構造では丹波帯に属している。南側の中国自動車道沿いに断層があり、東西方向の交通路となっている。長野多イ谷遺跡北側の大内川沿いにも断層が存在するようである。谷地形は河川によって開析されたもので谷底平野になっており、そこに長野多イ谷遺跡は立地している。周辺部は段丘面である。遺跡南側に山ヶ谷池があり、南側からの谷部が接続している。西側は現状では中小企業大学校のグランドがあり高くなっているが、大半は南側丘陵を削平した土と盛土によって造成された部分で、本来は谷地形で調査地点と続いている地形になっていた。



前田遺跡調査風景

福崎町では旧石器時代からの遺跡・遺物が確認されているが、市川西岸では縄文時代からの遺跡が知られている。高岡地区では桜の林谷遺跡で、石匙などの石器が採集されていたが最近の調査で落とし穴が検出されている。弥生時代の遺跡は市川西側は明確でない。宮ノ前遺跡や神谷ヤブノハナ遺跡で弥生中期の土器が出土している。駅前の中溝遺跡で中期の溝が、山崎の朝谷遺跡で後期の土器棺が出土している。終末の土器が宮ノ前遺跡・福田東田黒遺跡・西治下代ノ下モ遺跡や福田町田、馬田スガキで採集されている。西治下代ノ下モ遺跡では古墳時代になると集落を形成する。後期に製塩土器を保有している点も注目される。古墳は福崎町内で確認されているが、古相の古墳は高橋にある。高橋古墳群で早い段階に鉄剣が出土したことでも知られている。箱式石棺を主体部とする6基以上の小円墳で構成される。今のところ福崎で最も古い古墳と考えられている。次の古墳は山崎所在の大塚古墳である。30m前後の円墳で、長さ12mを超す大型の横穴式石室を主体部としている。土器棺を出土した地点の隣接地に朝谷古墳群が築かれる。大塚古墳に続く時期の大型の石室を保有する1号墳（狐塚）が残存している。神谷古墳も古い時期の古墳であるが石室の高さが低くなり石室長が長くなっている。

空間的には狭くなってしまっており、末期の様相を示している。福田には東大谷古墳・宮山古墳・上垣内古墳・小山古墳の横穴式石室を主体部とする古墳があり、高岡地区には塩田山東2号墳・塩田山東古墳（桜谷古墳）・五郎が谷古墳が、山崎には馬ウ子古墳群や石棺出土古墳（山崎古墳群とされるが位置不明）、西治には三昧谷古墳群・数可ノ古墳、高橋には佐本古墳が存在する。奈良時代の遺構は矢口遺跡の掘立柱建物だけであったが、最近の調査によって高岡の各遺跡で確認されている。遺物は宮ノ前遺跡・觀音堂遺跡などでも確認されている。中世の遺物も同様で広範に各地で採集されている。

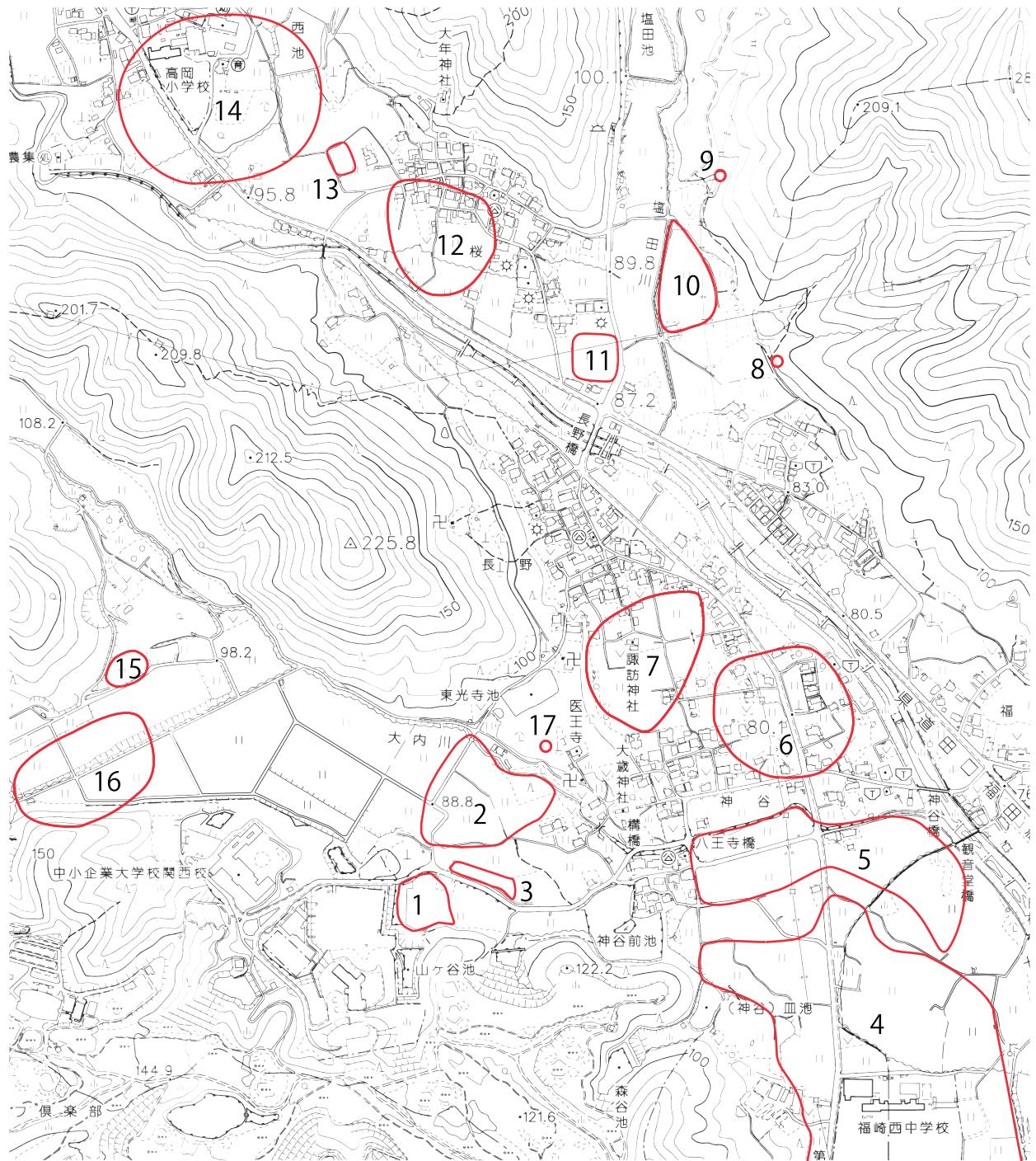


図4 長野多イ谷遺跡の位置と周辺の遺跡

- | | | |
|--------------|-------------|-----------|
| 1 長野多イ谷遺跡 | 2 神谷ヤブノハナ遺跡 | 3 前田遺跡 |
| 4 宮ノ前遺跡 | 5 観音堂遺跡 | 6 下々通遺跡 |
| 7 長野諏訪神社周辺遺跡 | 8 塩田山東古墳 | 9 塩田山東2号墳 |
| 10 狐塚遺跡 | 11 桜東畠遺跡 | 12 桜遺跡 |
| 13 桜竹之後遺跡 | 14 林谷遺跡 | 15 雨田遺跡 |
| 16 矢口遺跡 | 17 神谷古墳 | |

II 調査結果

1. 遺構

調査は3区とも1面で行った。

1区

検出した遺構は、溝・暗渠である。遺物は弥生時代から中世のものが出土しているが、大半は中世の土器である。

層序は耕土の下に、第2層にぶい黄極細砂（耕土・小礫含む）があり、第3層は盛土で地山土と4・6層の混じった層、第4層暗灰黄シルト質極細砂、第5層盛土で第2層と同じように混ざった層、第6層灰黄褐粗～中砂（礫含む）である。第6層が地山である。

溝は弧状に巡っている。幅0.6～0.8mで深さは0.15～0.45m、調査した長さ17.5mを測る。調査区北側に延びているが、現状では北側は一段低くなっている。断面で見ると下層にも溝があり、耕作面が3面あり水田を広げていった状況がうかがわれる。暗渠は南北方向に延びている。胴木を並べ上に礫を敷き並べている。

出土遺物はコンテナ1箱と少ない。須恵器・土師器・陶磁器で、少量の弥生土器（縄文土器の可能性のある破片も）・奈良時代の須恵器・製塩土器も含まれるが大半は中世のものである。

2区

層序は第1層耕土、第2層明褐シルト質極細砂、第3層灰オリーブシルト質極細砂、第4層灰シルト、第5層灰オリーブシルト、第6層オリーブ黒シルト、第7層明黄褐シルトである。第7層が地山で、北側は落ち込んでいるので地山は検出していない。

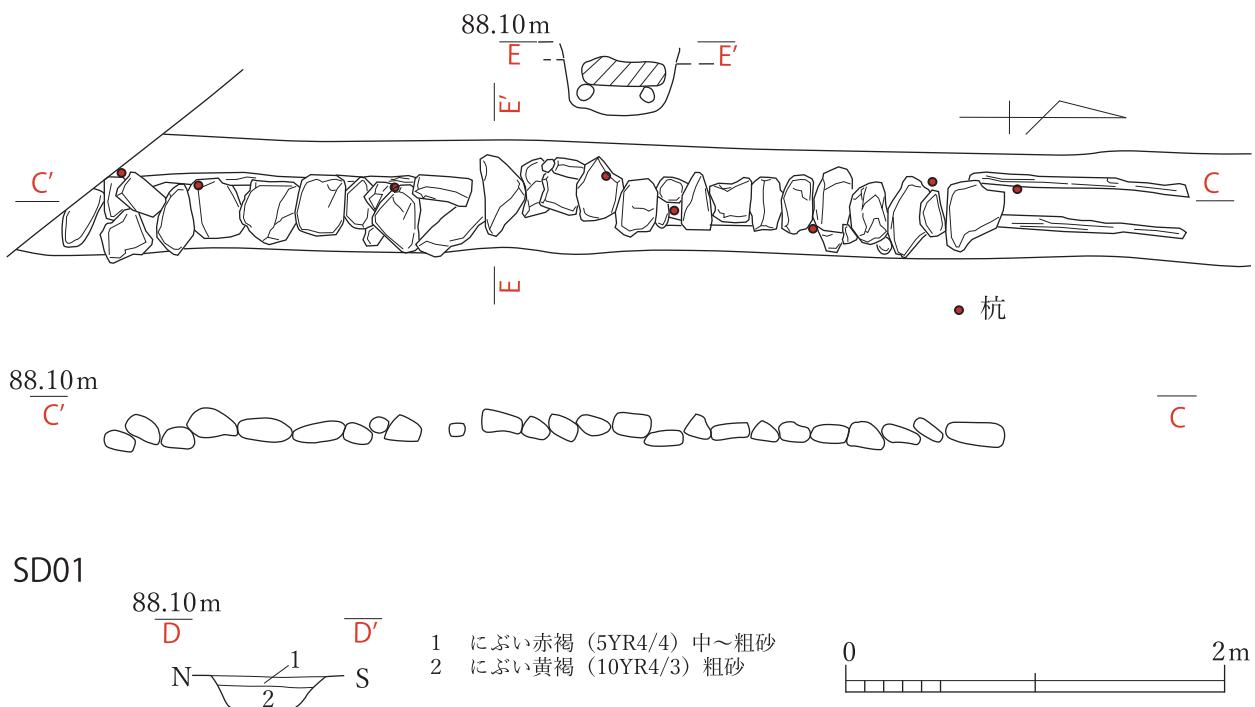


図5 1区遺構実測図

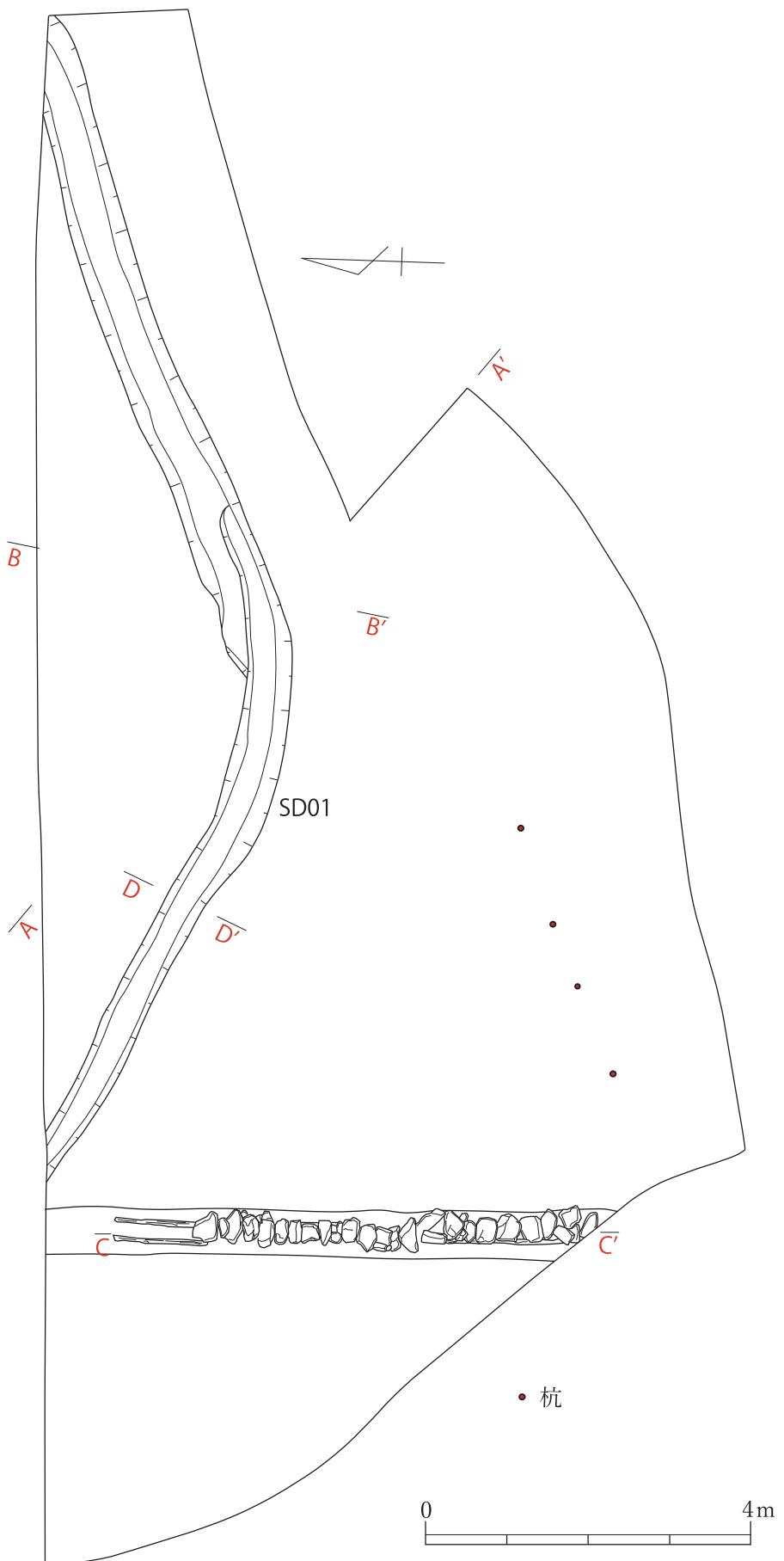


図6 1区平面図

1区 東壁

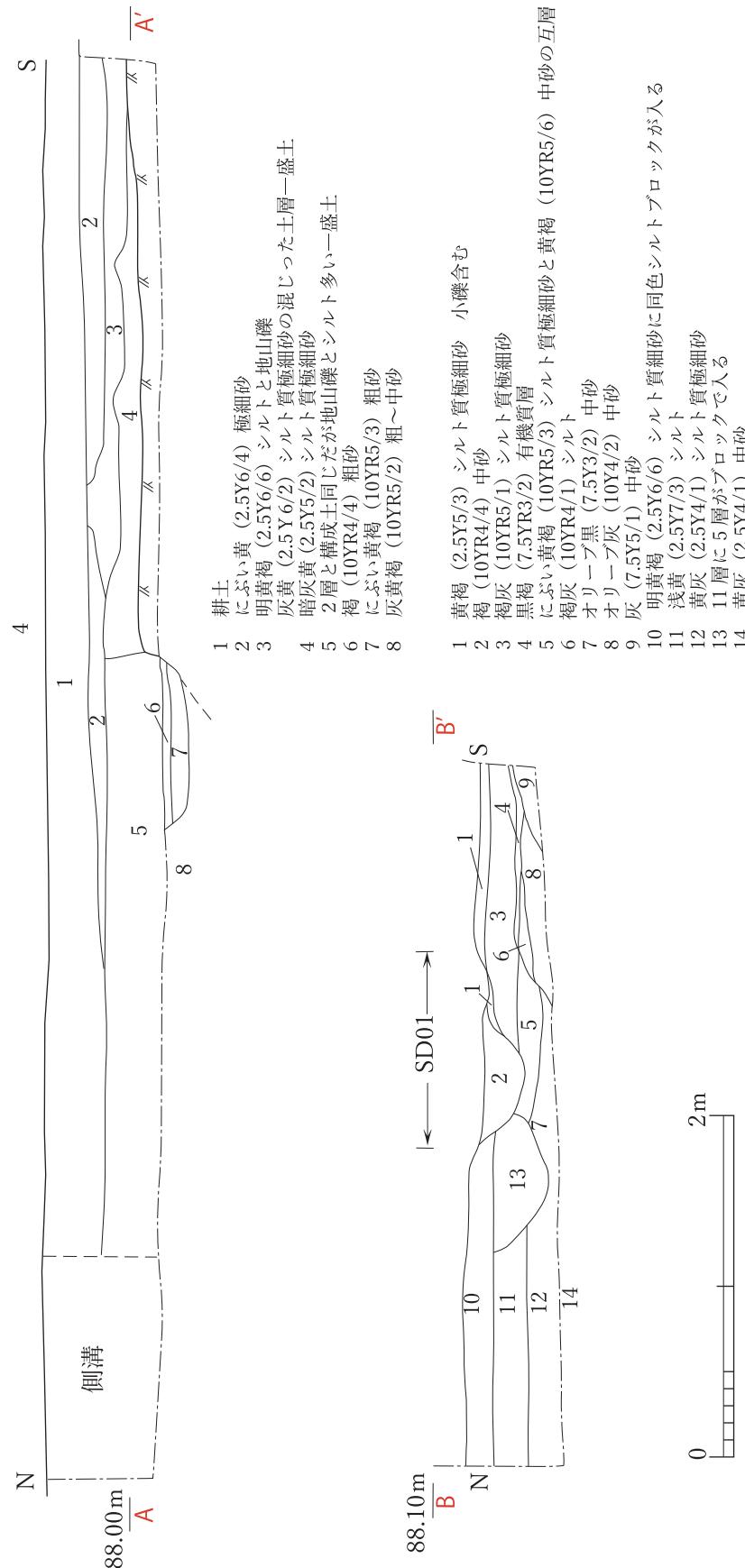
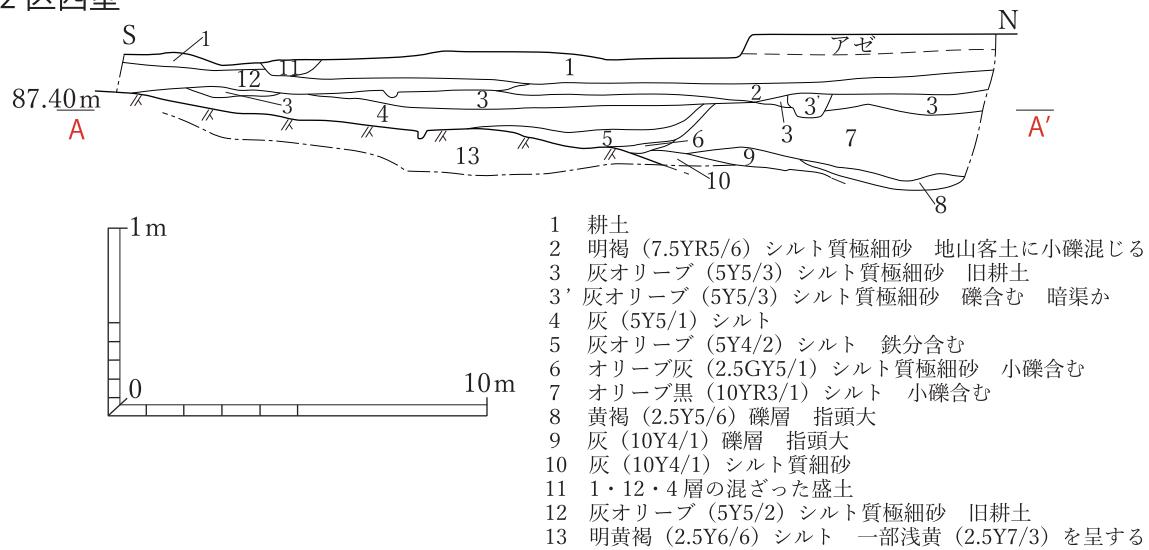


図7 1区土層断面図（断面の位置は図6に記入）

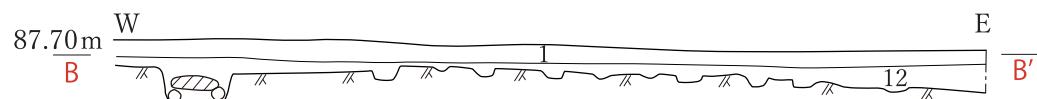


図8 2区平面図

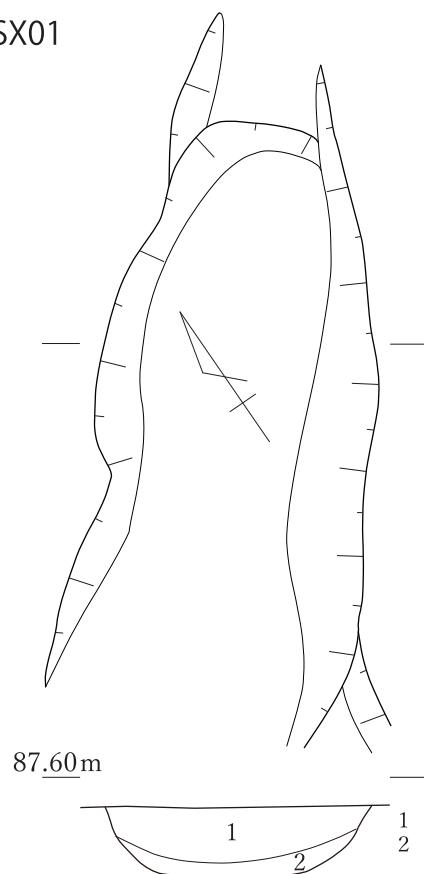
2区西壁



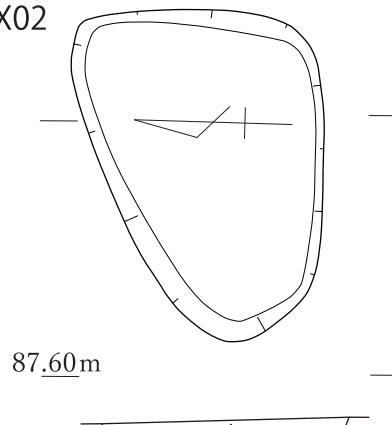
2区西側北壁 (鋤溝)



SX01



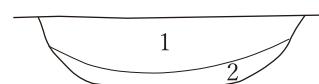
SX02



87.60m

1 オリーブ褐 (2.5Y4/4) 粗砂 (礫含む)

87.60m



1 灰 (5Y5/1) 砂礫 角礫とシルト質細砂
2 オリーブ褐 (2.5Y4/4) 砂礫 角礫と粗砂

0 2m

図9 2区土層断面図・遺構図

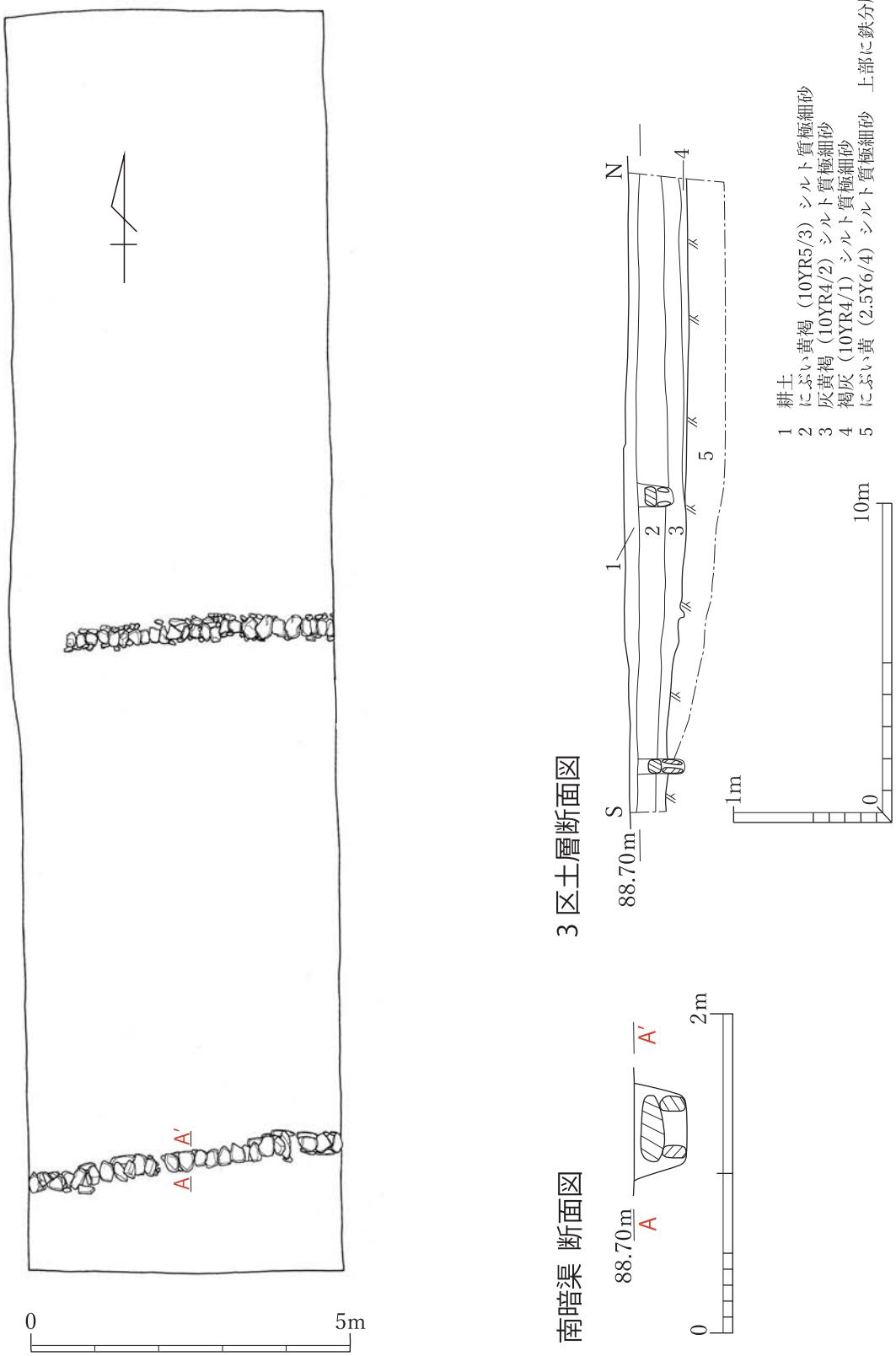


図 10 3区平面図・遺構図

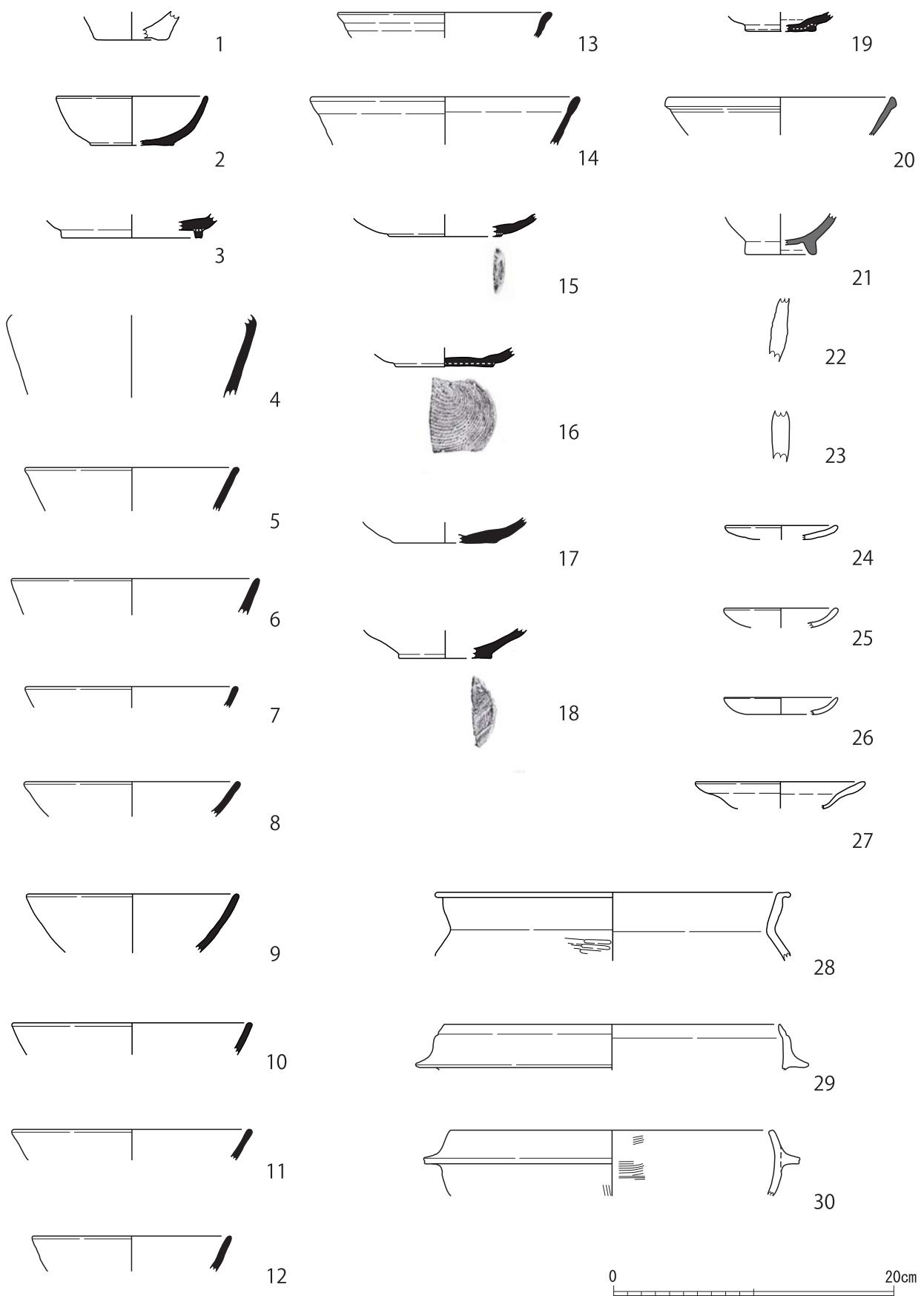


図11 出土遺物実測図 (1)

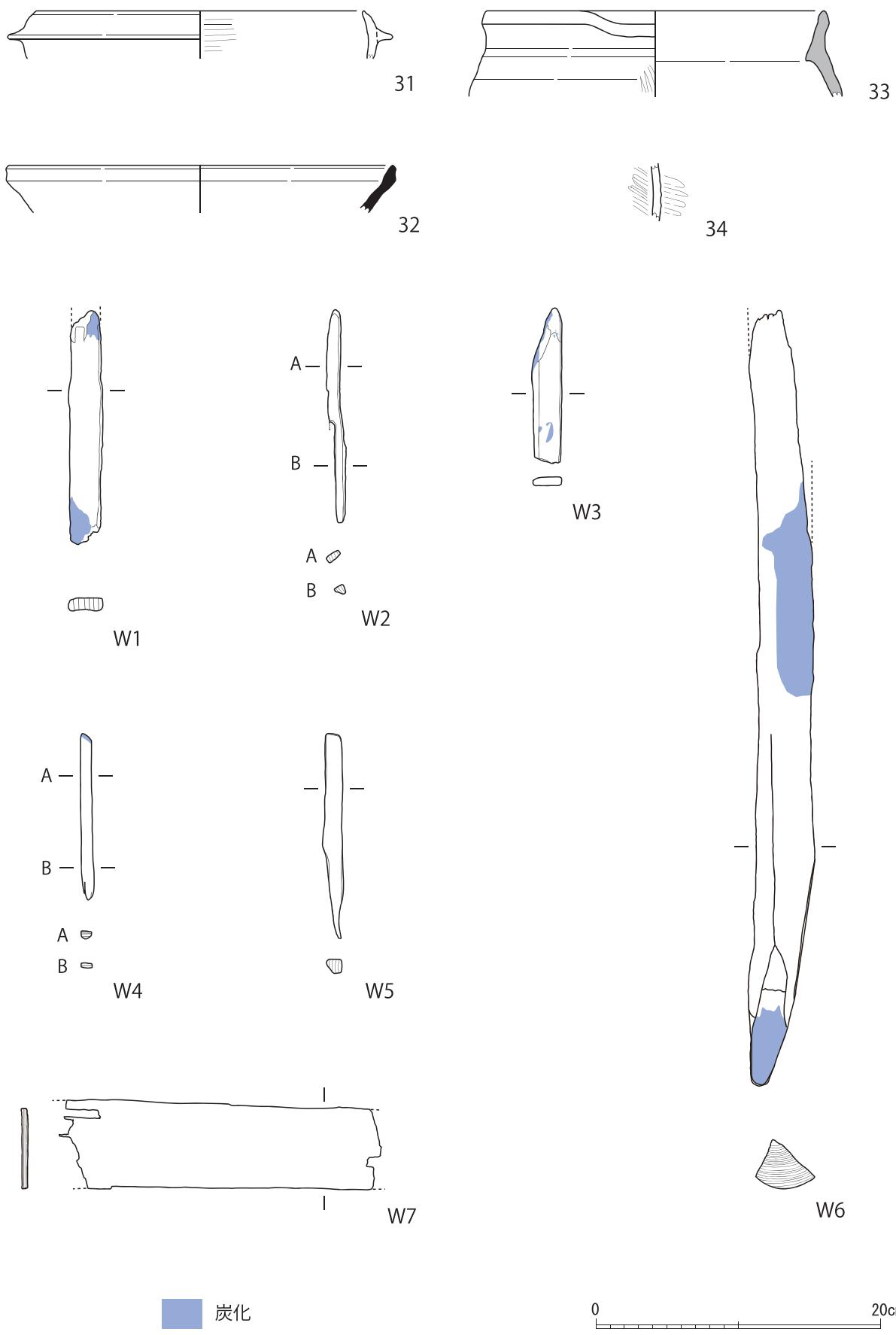


図 12 出土遺物実測図 (2)

検出した遺構は溝・暗渠・落ち込み・ピット・旧河道である。溝は幅1.8m、深さ0.2mで長さ4.8mを測る。西側で検出され、南北に延びる2条の暗渠の間に位置する。暗渠は3条検出している。2条は南北方向に延び、5m空けてほぼ平行に位置している。もう1条は東側の暗渠から東側に直交して築かれている。3条とも胴木を置いて上に礫を敷き詰めた暗渠である。落ち込みは溝南側にあり、最大長1.8mを測る不定形である。性格は不明である。旧河道は北側で検出している。古い段階のものは谷底にある大きなものである。旧地形の底は深く北側へ延びている。堆積段階で河道の位置は移動し、北側の地形が高くなり、河道は南側になる。河道から曲物・付け木などの木器や土器が出土している。

3区

層序は第1層耕土、第2層にぶい黄褐シルト質極細砂、第3層灰黄褐シルト質極細砂、第4層褐灰シルト質極細砂、第5層にぶい黄灰シルト質極細砂である。第5層が地山である。

検出した遺構は2条の暗渠である。東西方向に築かれたもので9m離れている。暗渠は他区と同じで胴木を並べてから礫を敷き詰めたものである。床土の下に構築されている。

2. 遺物

出土遺物はコンテナ4箱と多くはない。遺構の時期以前の遺物が多いのが特徴である。弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・木器が出土している。検出した遺構から出土しているものもあるが、この遺物が遺構の時期を示すものではなく、前代の遺物である。大半は包含層出土である。3区旧河道からも出土している。

弥生土器（1）

後期甕底部で、平底で磨滅著しい。外面はタキかと思われるが明らかではない。内面は黒っぽく外面とは異なっている。小石粒多く含む。

須恵器（2～19・32）

2は口径が小さく器高も低いことから古代の杯としたが、底部があることから椀かもしれない。内湾し口縁端部丸く重ね焼の痕跡残る。吻口げで、底面は未調整。3は杯b底部で、やや内側に傾く断面方形の高台を有する。体部は内湾する。4は長頸壺の体部下半である。上端部が肩部に直線的に続くと思われる。外傾し自然釉が付着している。5～14は口縁部すべて小片である。5～7は直線的なので杯と思われ、6・7は胎土や色調から杯であろう。それ以外は椀と思われる。重ね焼き痕跡があるものが多く、口縁端部の形状は角張るものと丸いもの、肥厚気味のものがある。体部も外傾するもの、内湾するものがある。9は自然釉が付いている。12は端部が外反し、13も端部やや肥厚するが、14は極端に肥厚している。15～19は椀底部で、磨滅しているものもあるが、糸切り底と思われる。18・19はベタ高台である。32は東播系須恵器の捏鉢口縁部で、端部内側に肥厚する。重ね焼き痕が残る。

陶磁器（20・21）

20は白磁碗口縁部で、玉縁で端部は尖り気味で、玉縁口縁の下に凹線を有する。体部は内湾する。21は椀底部である高台が付き、底面（畳付き）と内面は釉がかかっていない。高台は直立し変化点を持つ断面台形である。底面は薄く、外面は横方向に段状のラインが看取される。一部だけ縦方向にも文様のように見える部分がある。図化していないが、他にも3点の磁器が出土している。1点は鎧蓮弁の龍泉窯青磁体部で、青白磁と白磁の碗小片が各1点である。

製塙土器（22・23）

2点とも内湾する体部で^ヒ成形の厚手の土器である。磨滅顯著で、成形技法など看取できない。他にも数点同様な破片が出土している。

土師器（24～31）

24～27は小皿である。24～26は口径小さく器高も低く、内湾し端部丸い。磨滅しているが、^ヒ成形のちヨコゲで仕上げていると思われる。27は体部屈曲するての字口縁で、端部肥厚気味に厚くなっている。逆に底近くは薄く仕上げられている。^ヒ成形の痕跡残している。28は甕口縁部である。口縁部は内湾し端部を外側に水平につまみ出している。肩部は内湾し外面に平行タキが施される。煤付着しており、特に外面は炭化物が付き、表面変化している。29～31は羽釜である。29は端部が稜線を持ってから大きく内側に内傾し端部尖る。鍔はやや外反し煤多く付着している。30は内湾する体部から口縁部で端部丸く、鍔は水平に延び端部角張る。鍔は強く焼けて赤変している。31も内湾する口縁部で端部内側に尖らす。鍔は短く水平に延び、端部尖る。内面は粗い横方向のハセ整形である。

陶器(33)

備前焼壺口縁部で、頸部内側が突帯状になっている。端部は肥厚し丸い。頸部に浅い沈線が認められる。口縁部が歪んでおり片口状になっている。本来の形状なのか歪んだものか不明である。

瓦質土器(34)

胴部の破片で外面にタキが見られる。内湾しており、鍋か羽釜体部であろうか。

木器（W1～W7）

7点出土している。W1は板材で上下が焼けている。幅広であるが付け木と思われる。W2はヘラ状の板材で上半は平たく、下半は棒状になっている。W3は付け木で、板材で下端が焼けている。W4は棒状で上端が焼けしており、付け木である。W5は先を鋭く尖らせた棒状製品である。断面は不定方形で自然木をみかん割りしたものである。W6は径4.5cmの丸太材で樹皮は残っていない。枝は払っている。先を手斧で削って尖らせている。W7は曲物の側板で、薄く仕上げている。それ以外に自然遺物であるが桃の種も出土している。

番号	種別	器種	遺構	法量 (cm)				調整		備考
				口径	器高	腹径	底径	外	内	
1	弥生土器	甕	3 区		残2.05		(5.0)			
2	須恵器	椀	2 区暗渠 2 内	(10.6)	3.5		(6.0)			
3	須恵器	杯	2 区		残1.7		(10.0)			
4	須恵器	壺	1 区		残5.3					
5	須恵器	杯	2 区	(15.0)	残3.1					
6	須恵器	杯	2 区	(17.0)	残2.6					
7	須恵器	杯	2 区北	(15.0)	残1.5					
8	須恵器	椀	2 区	(15.0)	残2.5					
9	須恵器	椀	1 区	(14.8)	残4.2					
10	須恵器	椀	2 区	(17.0)	残2.25					
11	須恵器	椀	2 区	(17.0)	残2.2					
12	須恵器	椀	1 区	(14.0)	残2.5					
13	須恵器	椀	3 区	(15.0)	残1.8					
14	須恵器	椀	1 区	(19.0)	残3.4					
15	須恵器	椀	2 区		残1.6		(8.0)			
16	須恵器	椀	2 区		残1.4		(7.0)			
17	須恵器	椀	3 区		残1.8		(7.0)			
18	須恵器	椀	1 区		残2.0		(6.6)			
19	須恵器	椀	3 区		残1.4		(5.0)			
20	白磁	碗	2 区	(16.0)	残2.7					
21	白磁	碗	3 区		残2.9		(5.0)			
22	土師器	製塙土器	2 区		残4.6					
23	土師器	製塙土器	3 区		残3.6					
24	土師器	皿	3 区	(7.8)	残1.0					
25	土師器	皿	3 区	(8.0)	残1.4					
26	土師器	皿	2 区	(8.0)	1.2		(5.0)			
27	土師器	皿	3 区	(12.0)	残1.9					
28	土師器	甕	2 区	(25.0)	残4.9			平行タタキ		
29	土師器	羽釜	2 区	(24.0)	残3.3					
30	土師器	羽釜	3 区	(23.0)	残4.7			ハケメ		
31	土師器	羽釜	2 区	(23.0)	残3.35			ハケメ		
32	須恵器	鉢	2 区	(27.0)	残3.3					
33	備前焼	壺	2 区	(23.6)	残6.0			ヘラ描き		
34	瓦質土器	鍋	2 区		残4.1			平行タタキ	ヘラミガキ	
W1	木製品	付け木	1 区	長さ 16.4	幅 2.4	厚さ 0.9				
W2	木製品		3 区	長さ 15.0	幅 1.0	厚さ 0.7				
W3	木製品	付け木	2 区暗渠	長さ 10.9	幅 2.1	厚さ 0.8				
W4	木製品	付け木	1 G	長さ 11.75	幅 1.9	厚さ 0.6			R2試掘	
W5	木製品	付け木	2 G	長さ 14.4	幅 1.5	厚さ 2.0			R2試掘	
W6	木製品	杭	2 区 西拡張区	長さ 54.7	厚み 4.1					
W7	木製品	曲物	2 区北	長さ 22.6	幅 6.2	厚さ 0.4				

表 1 遺物観察表

III おわりに

近世の排水施設が主体で、排水に苦労していたことが看取される遺跡である。1区暗渠は1本、2区暗渠は2本で南北方向であるが、3区暗渠は東西方向2本と南北方向1本である。2区3区は2本の暗渠があるが間隔は異なっている。排水状況や地形に則して構築したことがわかり、耕作のための苦労が看取される遺構群である。

包含層から時期の遡る遺物が出土している。現状では北側の矢口谷と言われる深い谷が見渡せるが、その手前に墓地と前田遺跡の立地する丘陵部が存在する。多イ谷と呼ばれる谷は丘陵で隔絶していることから、遺物本来のあった遺跡は当然谷上流部に存在したことになるが、今のところ確認されていない。時期幅のある複合遺跡が存在する可能性が高く、その確認が急務であろうと考えられる。その中でも最近の高岡周辺の調査で多く出土する製塩土器が少数なりとも出土していることは注目される。矢口谷には矢口遺跡があり、官衙的性格を有する規模の大きな遺跡ではないかと思われる。それに隣接する谷にも同時期の遺跡があったことになり、奈良時代の高岡周辺にある遺跡の性格を考える上で重要なと思われる。



北東上空から

IV 福井谷遺跡の概要と一部の遺物

1. 調査の概要

福井谷遺跡は福崎町八千種字福井谷に所在する遺跡で、ほ場整備事業に伴い平成11年度に福崎町教育委員会が調査主体となって発掘調査した。調査は平成11年6月7日～9月30日に出田直を担当者として実施した。

北側に位置する高倉山から南東方向に尾根が延び加西市との町境になっている。尾根から南西方向に幾つかの支尾根が走りその間に谷地形が存在する。福井谷は東端にある谷地形で奥に福井谷池が存在する。谷入口から池へ向かう道などで須恵器が採集され、西側斜面に須恵器窯跡が2基あると想定されていた。谷入口部南側には工場が建設されている。工場と山裾に通る道の間が調査地区である。東西に細長い調査区で11年度調査のF区とG区が該当するものと思われ、約320m²を調査した。東西に長いトレンチ状の調査区で、東側は厚い包含層が認められる。8世紀に限定される遺物が出土し、その中には窯壁や歪んだ須恵器も認められることから福井谷窯跡からの流入で灰原の一部とも考えられる。ただ、土馬や斎串・土師器・木製品も出土しているので単純な生産遺跡ではなく、律令期の祭祀遺跡でもあろうと思われる。調査区西側の谷入口部はピット・土坑が中心で生活遺構が顕著に調査されている。また、中世に続いて遺構が検出されていることが、東側とは異なっている。柱痕跡を確認したものもあるので掘立柱建物が存在したと思われる。北西に位置する八千種庄文治口遺跡との関連がうかがわれる。八千種庄文治口遺跡は谷地形の外で扇状地に位置している。福井谷の西側にある谷入口部南斜面に八千種庄文治遺跡は存在し、福井谷遺跡東側と非常に似た調査結果で、須恵器窯跡と祭祀遺跡両者があったように思われる。人形などの木製品が出土している。この3つの遺跡は同時併存し緊密な関係があったことは確実である。

2. 遺物

遺物量は多く、コンテナ140箱以上を数える。窯跡灰原出土の窯跡関連遺物であろう須恵器が大半であるが、違う性格の遺物も確認されており注目される。須恵器の器種は杯・蓋・高杯・皿・壺・甕・鉢・甑・鷦尾・硯である。須恵器以外の遺物は土師器・木器・金属器と土製品である。須恵器の一部と窯跡以外の性格を有する遺物を中心に今回は報告する。

須恵器（1～28）

1～7は杯蓋である。1～5には宝珠つまみが付き、頭頂は尖るが全体に扁平で高さも低い。天井部は平坦で肩部の器壁が厚くなっている。端部には個体差がある。1は下に肥厚し、2は斜め下方につまみ出し、6は端部近くで屈曲し端部丸くつまみ出す。3・4の天井部の器壁は厚い。7は稜椀の蓋で、先の尖った低く径の大きなつまみである。

8～10は杯Aで底部平坦ながら丸みを持ち体部は外傾し端部丸い。8は底部の器壁が厚い。10は重ね焼きの痕跡が残り底部は還元せず赤褐を呈する。11は内湾し端部外へ反り、器高が低い。12は稜椀口縁部である。端部は外側に反り、体部の稜線は甘いタイプである。胎土は精良である。13～16は杯Bで、13は器壁厚く内湾する体部で高台は低く幅広である。14の底部は厚く平坦で、体部は直立ぎみに外傾し口縁部反りぎみになる。15の高台は断面方形で高く、16は外側に開き端部肥厚する。

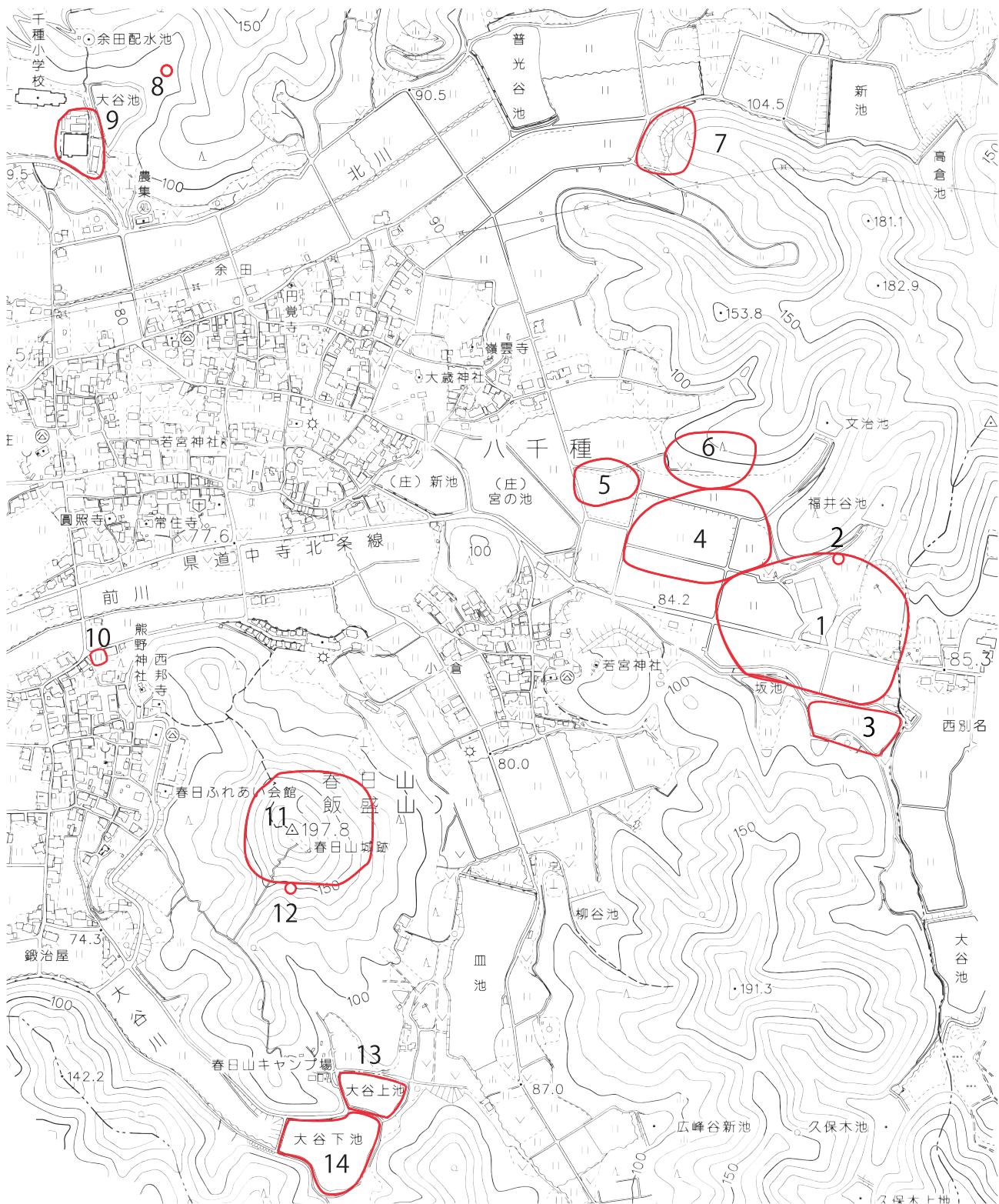
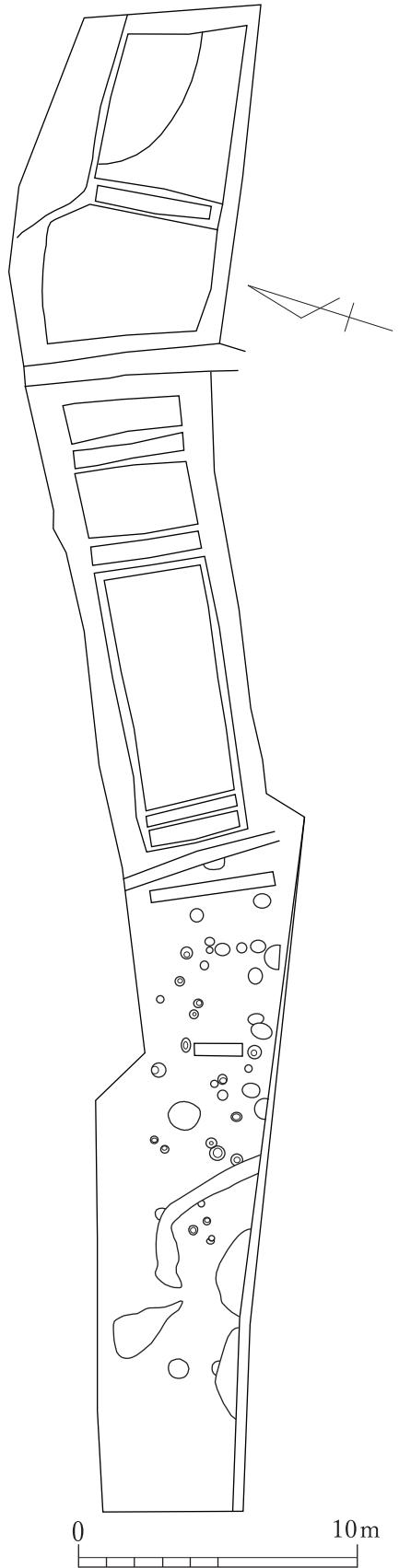


図13 福井谷遺跡の位置と周辺の遺跡

- | | | |
|-------------|---------------|-------------|
| 1 福井谷遺跡 | 2 福井谷窯跡 | 3 八千種庄廣芝遺跡 |
| 4 八千種庄文治口遺跡 | 5 八千種庄宮ノ池沢遺跡 | 6 八千種庄文治遺跡 |
| 7 奥ノ向遺跡 | 8 大谷古墳 | 9 八千種余田大谷遺跡 |
| 10 鍛冶屋裏垣内遺跡 | 11 春日山城跡（飯盛山） | 12 姥懐古墳 |
| 13 大谷上池遺跡 | 14 大谷下池遺跡 | |



17は長頸壺口頸部で端部を欠いている。体部との接合部で割れており、外反し中央付近に沈線を有している。18は長頸壺底部である。外側に開く高台で体部は外傾する。高台部分に窯壁が付着している。19～24は甕口縁部である。20～24の口縁端部は肥厚ぎみに端面になり、20・21・24には波状文が施されている。21は1本の矢書きである。22の肩部は内湾し口縁部外反し端部大きく内側に肥厚し上は面になり、タスキが見られる。

25は外反する手捏ねの把手を持つ体部である。内面には同心円、外面には平行タスキが見られる。甑などの炊飯具である。26は口径の小さい特殊な蓋である。胎土精良で宝珠つまみを有する。自然釉が付着している。27はあまり丁寧な仕上げではないが、内面に突帶を巡らせていることから硯と思われる。作りは杯蓋と同じである。28は擂鉢底部で底面に特有の刺突文を多数アトランダムに施す。

土師器 (29)

托底部で、中央に穿孔を持つベタ高台で体部との接合部で割れている。

土製品 (30・31)

2点とも土馬である。手捏ねで作られており、土師質である。30は胴部で4脚と頭部と尾先端を欠く。脚部頭部は接合部で離合している。粘土の接合部が残り彫り整形しており、下半身は黒斑状に色調を変えている。突帶と小さな竹管文と珠文状の粘土で馬具を忠実に表現している。31は胴部の破片で頭部が割れた状態かと思われる。30と比べると1回り小さい。

金属器 (M1)

青銅製品で鋳物未製品である。現状は輪状になっており、片側は付け根のような平坦になっている。断面は隅の丸い三角形で、バリが見られる。現状は円形であるが本来は棒（棹）状の製品であった可能性が高い。

木器 (W1～W 32)

祭祀具 (W1～W4)

W1は仏像である。高さ18cmの心持材で針葉樹と思われる。両手は身体側面に付くが手先を欠いている。前面後面とも直線に仕上げられている。衣文表現が見られ、冠も表現されているようである。手は合掌している可能性が高く菩薩形であろう。台座も有している。W2は人形の足ではないかと

図 14 福井谷遺跡調査区平面図

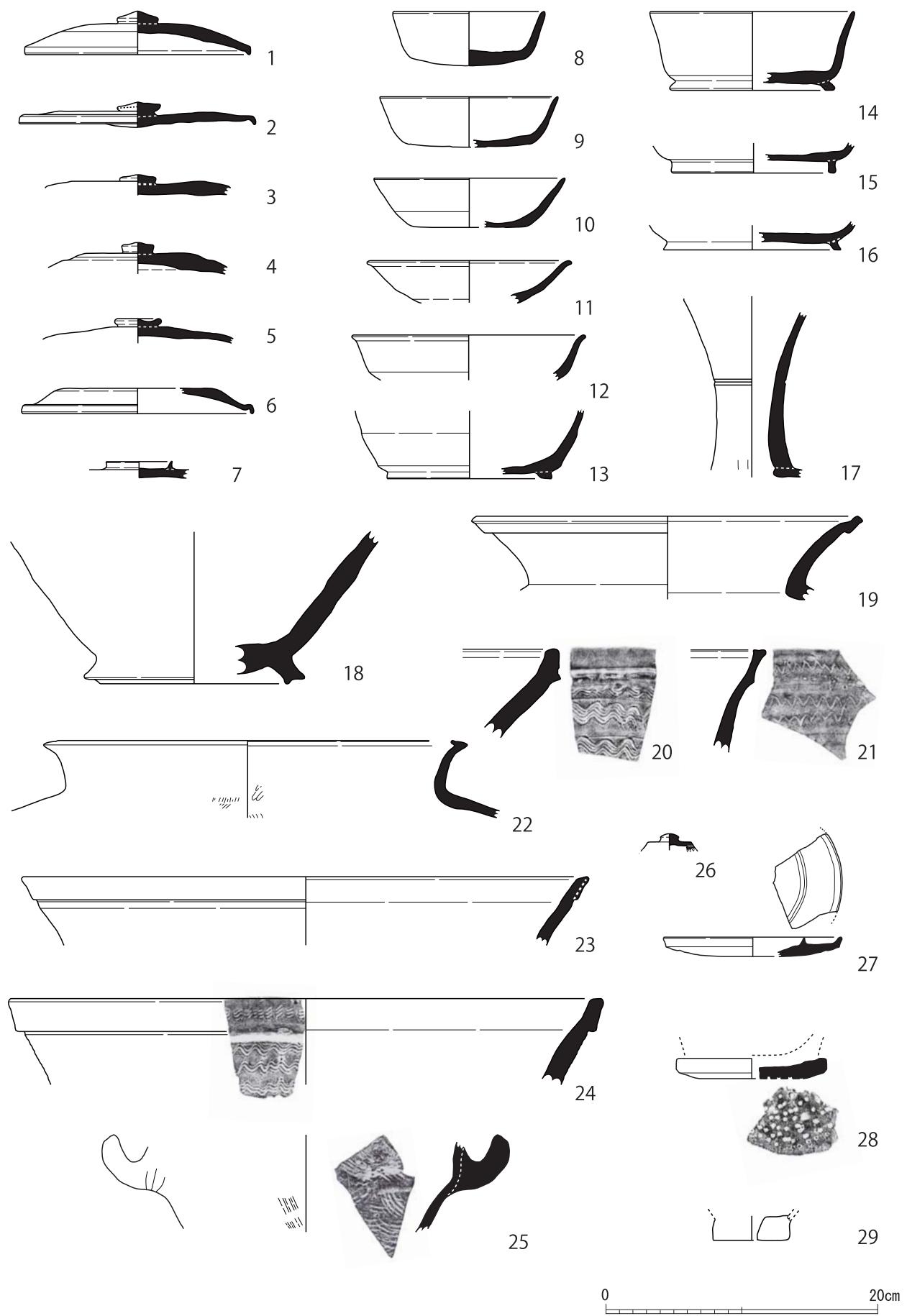


図 15 出土遺物実測図 (1)

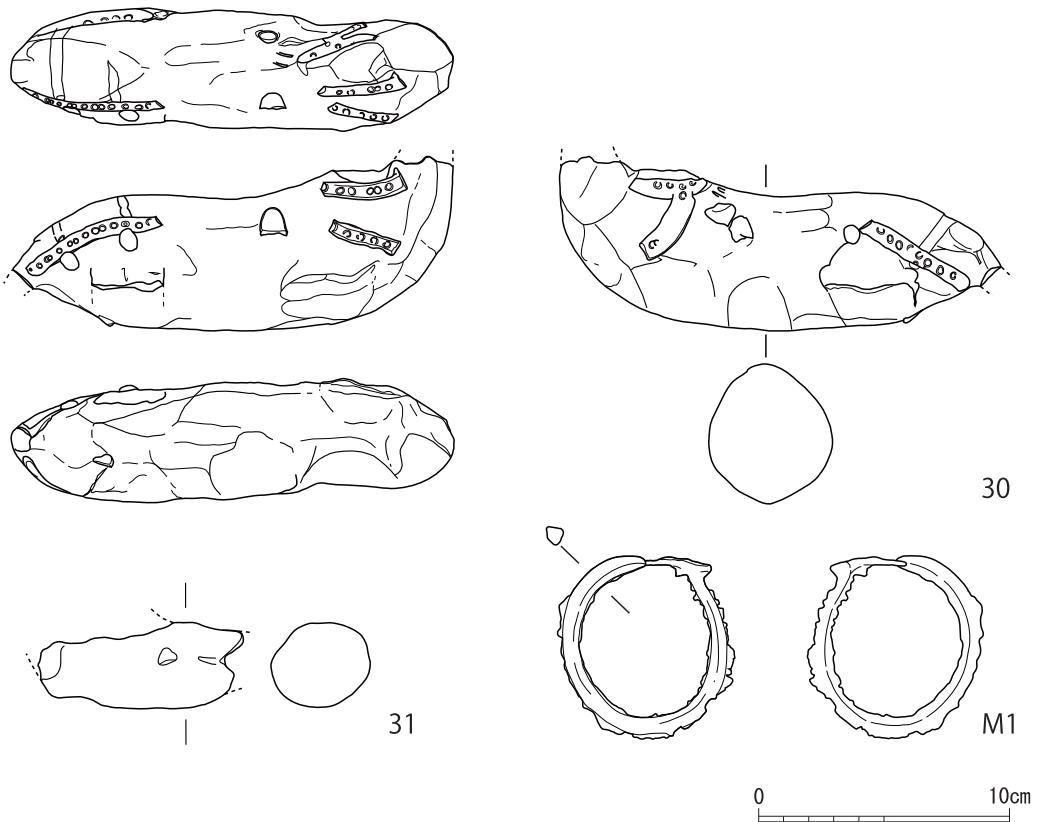


図 16 出土遺物実測図 (2)

思われる。上部は焼けて欠失している。片側に先を尖らせている。板目材で年輪部分を利用している点は祭祀具の可能性が高い。W3は板材で頭部の片側に切り込みがあり、祭祀具かもしれない。上下ともに直線で、下端は上面から斜めに僅かに削り出して尖らせるように細くしている。頭部から0.5cm下の左側に切り込みを入れる。下側に3つの小さい円孔がある。W4は板材で完形である。頭部丸く仕上げ左は直線で右面を斜めに仕上げて先を尖らせている。斎串の可能性も残るが少し短い。

容器 (W5~10)

W5は曲物底板で、2分の1程度残存している。W6は曲物底板で径8.6cmと小さい製品である。柾目材である。W7は右側が焼けており、元の状態が判らないが破損部と思われる。それ以外の面は丁寧に平滑に仕上げられていることから、容器の一部などと思われる。W8は挽物で一部を欠くが残存度は高い。径18cm、高さ1.2cmを測り、挽く際の回転痕跡残る。内面には刃物の傷跡が認められる柾目材である。W9は左側が割れている加工材である。側面を削り出して丸みを持たせており、挽物の一部もしくは下端が生きているように見えることから失敗品の転用かもしれない。W10は丁寧に仕上げられている。刃物傷跡は認められない。一部焼けている。

生活具 (W11・12)

2点とも木錘（槌の子）である。W11は中央の細い部分で2つに割れている。心持材で側面は大きく削っている。中央部分は細く仕上げている。W12は半分残っている。心持材で径は大きめで中央部分に向かって緩やかである。端面は比較的平坦に仕上げている。全体に整形痕が認められる。

角材 (W13~15)

W13は両端が折れている。W14は先を片側に尖らせてある。完形の可能性もあり、その場合は櫻

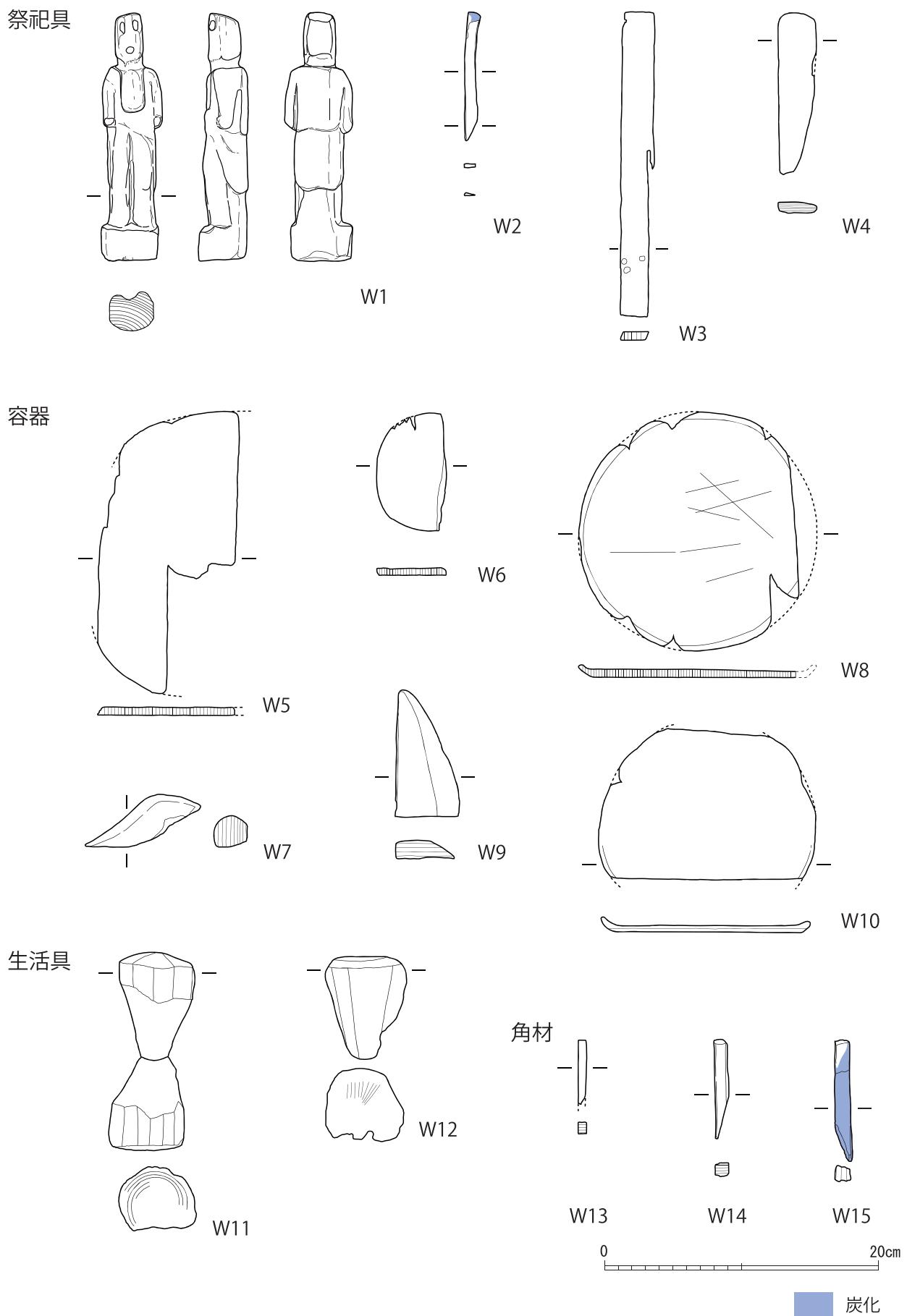


図 17 出土遺物実測図 (3)

建築材

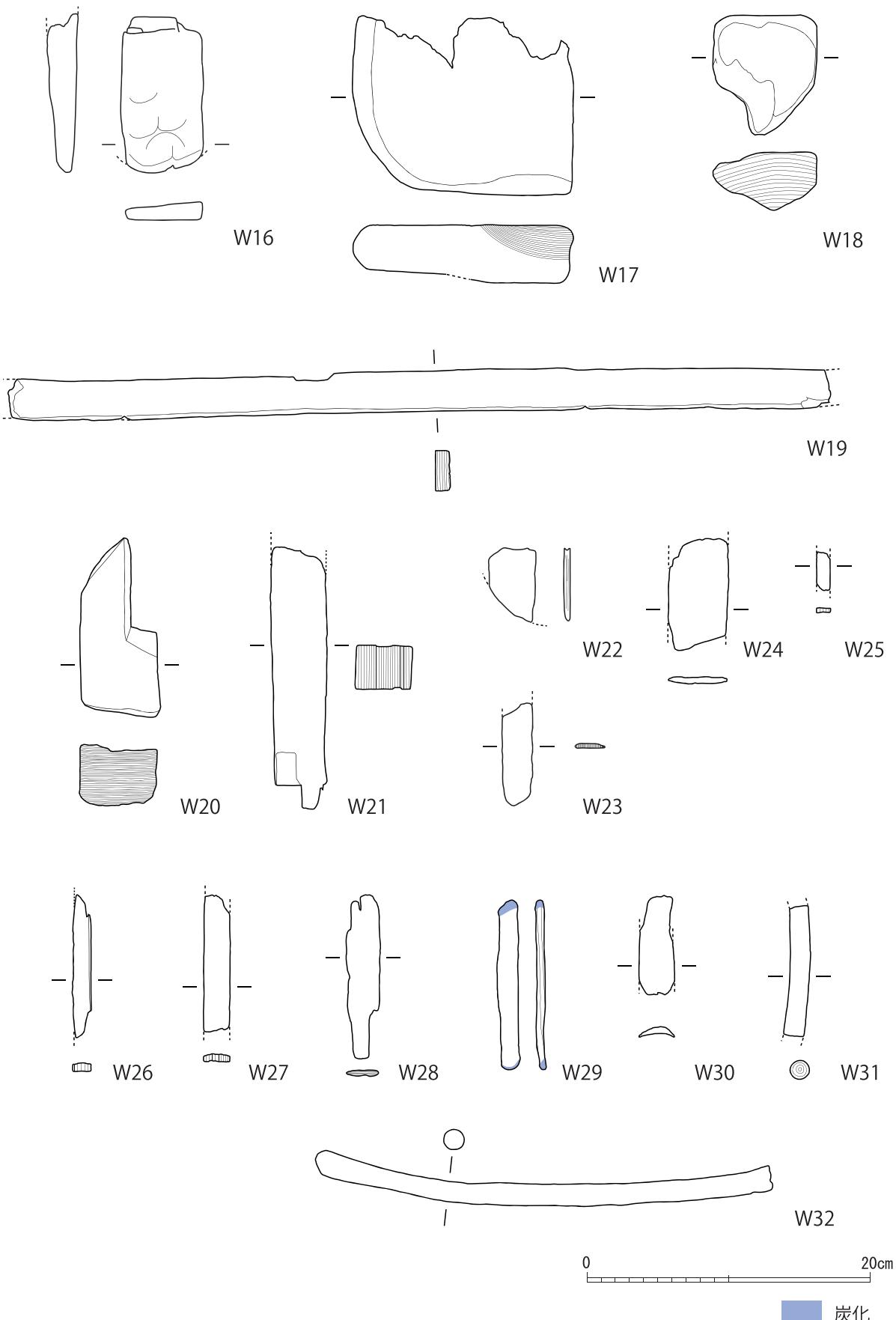


図 18 出土遺物実測図 (4)

番号	種別	器種	遺構	法量 (cm)				調整		備考
				口径	器高	腹径	底径	外	内	
1	須恵器	杯蓋	最東端下層	(16.4)	3.2					
2	須恵器	杯蓋		17.2	1.9					
3	須恵器	杯蓋	G区-e		残1.5					
4	須恵器	杯蓋			残2.3					
5	須恵器	杯蓋	最東端下層		残1.8					
6	須恵器	杯蓋	最東端下層	(16.9)	残1.85					
7	須恵器	稜椀蓋			残1.2					転用硯
8	須恵器	杯	最東端下層	(11.0)	4.0		(8.5)			
9	須恵器	杯		(13.0)	3.7		(9.6)			
10	須恵器	杯	F-28 南1、南3	(14.0)	3.6		(8.5)			
11	須恵器	杯	G区-才	(15.0)						
12	須恵器	稜椀	最東端上層	(17.0)	残3.3					漆、もしくは墨付着
13	須恵器	杯	最東端下層		残5.0		(12.0)			
14	須恵器	杯	最東端下層	(14.8)	5.8		(12.0)			
15	須恵器	杯	最東端下層		残2.2		(11.8)			
16	須恵器	杯	最東端下層		残2.05		(13.0)			
17	須恵器	長頸壺			残13.1			沈線		
18	須恵器	長頸壺	最東端下層		残11.2		(16.2)			
19	須恵器	甕	最東端下層	(28.0)	残6.1				同心円文タタキ	
20	須恵器	甕	最東端下層		残6.55			波状文		
21	須恵器	甕	最東端下層		残7.5			波状文		
22	須恵器	甕		(18.0)	残5.7			平行タタキ	同心円文タタキ	
23	須恵器	甕	G区-e,f	(41.6)	残5.0					
24	須恵器	甕	G区-e,f	(43.6)	残6.3			波状文		
25	須恵器	甕	G区-e,f		残7.2			平行タタキ	同心円文タタキ	
26	須恵器	蓋			残1.2					
27	須恵器	硯か		(13.0)	1.4					ミニチュア土器
28	須恵器	スリ鉢	最東端下層		残1.5		(11.0)			
29	土師器	托			残1.8		5.5			底部刺突文
30	土製品	土馬		17.7×7.0						
31	土製品	土馬		8.2×3.5						
M1	銅製品			7.4×6.8×0.7						
W1	木製品	仏像		18.2×5.0×3.6						
W2	木製品	人形	G区-d	9.5×1.0×0.25						
W3	木製品			22.9×2.3×0.6						
W4	木製品	斎串か		11.9×2.8×0.8						
W5	木製品	曲物		9.8×19.9						
W6	木製品	曲物		8.6×5.1×0.5						
W7	木製品			3.9×8.4×2.3						
W8	木製品	挽物		17.5×16.4×1.2						
W9	木製品	挽物か		9.4×4.7×1.3						
W10	木製品	挽物		15.8×10.9×0.5						
W11	木製品	木錘		14.7×5.5						
W12	木製品	木錘		7.7×5.9						
W13	木製品	G区-f③-木		4.7×0.6×0.85						
W14	木製品	G区-f③-木		7.2×1.0×1.0						
W15	木製品			8.9×1.1×1.2						
W16	木製品			5.8×11.0×2.1						
W17	木製品			15.6×12.4×4.1						
W18	木製品			8.5×7.3×4.1						
W19	木製品	G区-e		58.1×2.6×1.0						
W20	木製品	G区-f③-二		12.7×5.4×4.3						
W21	木製品	G区-f③		18.6×3.9×3.1						
W22	木製品			5.2×3.3×0.4						
W23	木製品			7.3×2.1×0.3						
W24	木製品			7.9×4.1×0.45						
W25	木製品	G区-f③-木		2.6×0.35×1.0						
W26	木製品			10.1×1.3×0.6						
W27	木製品			9.7×1.8×0.5						
W28	木製品			11.6×2.4×0.4						
W29	木製品			12.0×1.7×0.6						
W30	木製品			7.05×2.5×0.5						
W31	木製品			9.2×1.35						
W32	木製品			32.2×1.4						

表2 遺物観察表

か栓かもしれない。W15は角材で全体に焼けている。先を片側から尖らせ、強く焼けていることから付け木かもしれない。

建築材（W16～21）

W16は板材で下側を細くしており、建築材であろうか。もしくは盤・槽などの端部の可能性もあるが明確でない。W17は残存部を隅円に仕上げた厚みのある板材である。端部の一部が炭化している。心持材よりは外側を利用した板取りである。器種は不明だが、容器端部にすると厚みがあるので建築材の一部かと思われる。W18はW17に似た建築材の破片であろうか。下端部を抉っているように見えるが明らかでない。W19は断面長方形の長い板材である。建築材であろう。W20は建築材で繰り込みが見られる。左面と下面是手斧で仕上げており、生きた面である。右側のみ割れており、中央の繰り込みは孔にはならない。井戸枠などの転用材であろうか。W21は角材で建築材である。柄を作っているようにみえる。反対側は折れている。

板材（W22～29）

W22は板材で弧状を呈しているが厚みに差があり、柾目材であることから曲物底板ではないようと思われる。W29は付け木である。両端が焼けている。W23・W28も板材で、両端とも割れている可能性が高い。W24は刃物痕跡か手斧痕があるが、器種など不明瞭である。

自然木（W30～32）

W30は自然木の樹表部分である。W31は自然木で中央に材の孔があるので、弧状に曲がっている。W32は自然木で樹皮も残っている。曲がっているが自然の状態であろう。

3. おわりに

福井谷遺跡は小面積の調査ではあるが、多くの問題点を提起している。明瞭な遺構は不明であるがある程度のピットは検出されている。多量の須恵器と特殊な遺物が出土している。多量の須恵器は西側山腹に所在する窯跡の灰原かその2次堆積と思われる。鴟尾を焼成した窯跡として意義深い。同じ八千種に所在する姥ヶ懐遺跡は唯一の鴟尾を埋葬施設にする遺跡で、福井谷窯跡との需給関係がわかれれば重要である。が、大きさなど異なり同一とは言えない。もう一つの性格は出土遺物から律令期祭祀遺跡であることである。隣接する八千種庄文治遺跡にも木製祭祀具が出土しており、福井谷周辺で律令期祭祀を行っていたことが判明している。日常製品やピットがあることから官衙的集落があったかもしれない。

性格の異なる遺構出土の土器の分別は出来ないので、須恵器はどちらに属するかは困難なのでそれ以外の遺物を中心に紹介した。木器はすべてを報告したが、この中にも祭祀と日常に分かれている。人形と斎串は3点だけだが祭祀が行われたことを示しており、容器もそれに伴うものと推測され、ある程度の木器は祭祀に関連すると思われる。神像出土例は幾つかあるが、仏像の出土は袴狭遺跡に次いで2例目で貴重である。青銅鑄造未製品も福井谷遺跡で生産していたことを示すもので、須恵器以外にも生産活動をしていたことを証明する遺物である。福井谷遺跡は、すべてを整理していないが8世紀前半に限られた短期間の、祭祀と生産を行っていた特殊な遺跡である。

多量の須恵器の整理には時間がかかることが予測されるが、今後福井谷遺跡Ⅱとして刊行できればと思っている。

写 真 図 版





長野多イ谷遺跡遠景（東上空から）
(右手前・前田遺跡、右後方・矢口遺跡)



長野多イ谷遺跡全景（南上空から）
(右手前・前田遺跡、右後方・神谷ヤブノハナ遺跡)

図版 2



長野多イ谷遺跡遠景（西上空から）
(中央は前田遺跡、後方は観音堂遺跡)



2・3区垂直写真

1 区



1 区遠景（北から）



調査前（東から）



調査準備（草刈り）



機械掘削



調査風景



調査風景



暗渠（南から）



暗渠（南から）

図版 4

1 区



暗渠（北から）



暗渠（北東から）



北壁



北壁



SD01 調査風景



SD01 アゼ（西から）



SD01（北から）



SD01（南から）

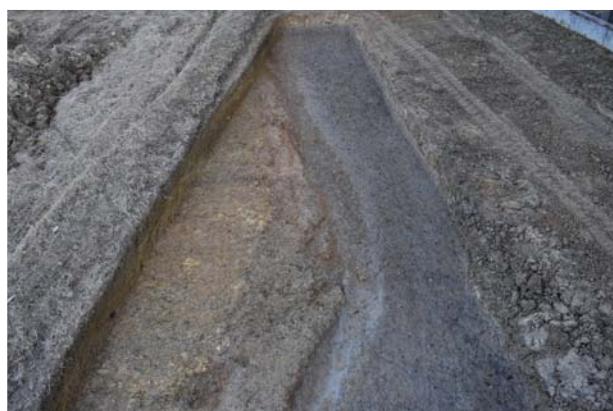
1 区



全景（西から）



全景（東から）



拡張区溝検出状況（西から）



拡張区溝検出状況（東から）



拡張区全景（西から）



拡張区全景（東から）



北壁



断割り（西から）



埋戻し



1 区遠景（北西から）

2 区



調査前全景（北から）



調査前全景（北東から）



機械掘削



機械掘削



暗渠 1（北から）



暗渠 1（南から）



暗渠 1 (北から)



暗渠 1 (北東から)



調査風景



調査風景



東半西壁



北壁



SX01 断面 (東から)



SX01 (東から)

2 区



SX01 (東から)



SX01 (西から)



SX01 (南東から)



SX01 (北から)



東半全景 (南から)



東半全景（北から）



調査風景



暗渠 3（西から）



暗渠 3（東から）



全景（南から）

2区・3区



全景（北から）



調査風景



2・3区全景（北から）



2・3区全景（南から）



2・3区全景（南上空から）

2 区・3 区



全景（西から）



2・3区全景（北上空から）



2・3区全景（北西上空から）



2・3区全景（南西上空から）



全景（東上空から）



拡張区旧河道



2区垂直写真

3 区



機械掘削



西壁



西壁（南暗渠部分）



西壁



全景（南から）



全景（北から）



南暗渠（東から）



南暗渠（西から）



全景（南から）



北暗渠（東から）



北暗渠（西から）



南暗渠断面（東から）



サギ・シカ足跡



埋戻し



埋戻し後（北から）

長野多イ谷遺跡





福井谷遺跡



北東上空から



西上空から



全景（西から）



西半全景（東から）



西端部（南東から）



西半東側（北から）



中央部分（東から）

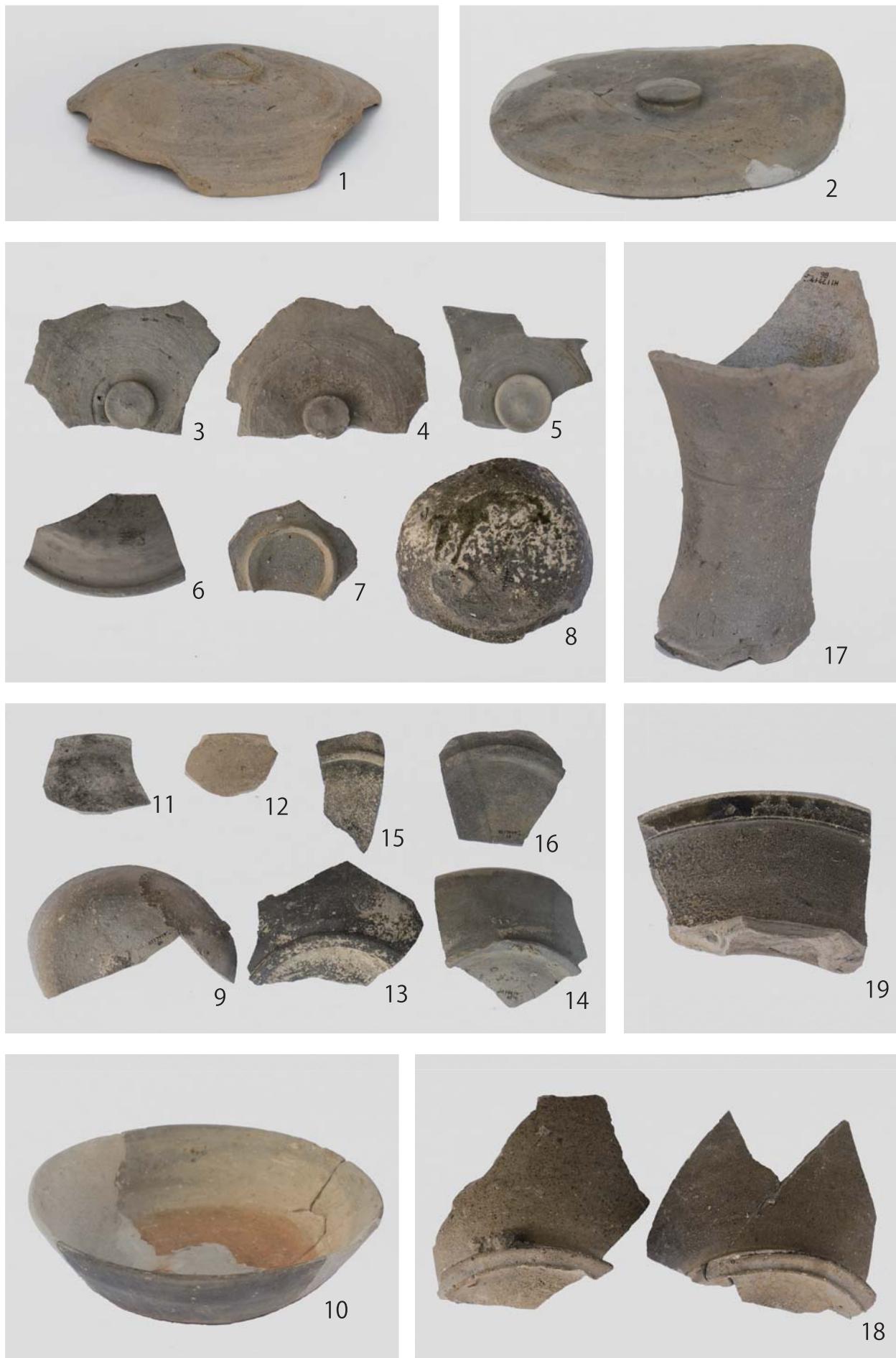


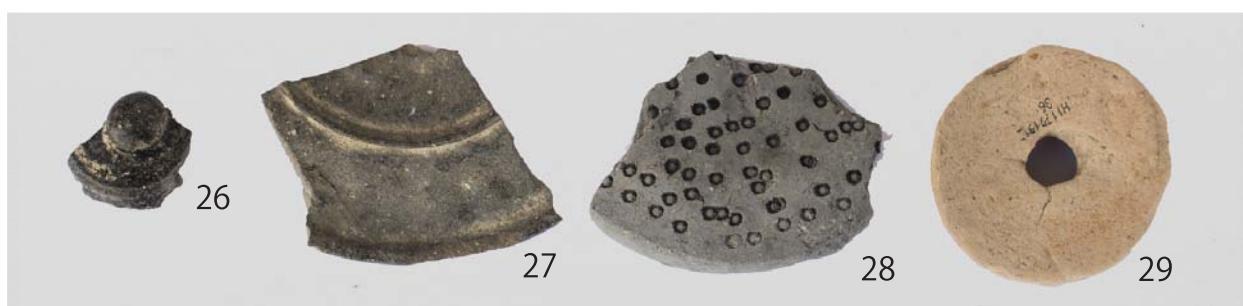
土層断面



福井谷遺跡 遺物出土状態

福井谷遺跡





福井谷遺跡





報告書抄録

ふりがな	ながの おいだにいせき	ふくいだにいせき
書名	長野多イ谷遺跡	福井谷遺跡 I
副書名	高岡・福田地区ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書	
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財調査報告	
シリーズ番号	29	
編著者名	渡辺 昇	
編集機関	福崎町教育委員会	
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1 TEL 0790-22-0560	
発行年月日	2023年3月22日	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯度分秒	東経度分秒	調査期間	調査面積 m ²	要因
		市町村	遺跡番号					
ながの お い だに 長野多イ谷 いせき 遺跡	かんざきぐんふくさきちょうとかおか 神崎郡福崎町高岡 あざ お いだに ばん 字多イ谷3043番ほか	28443	410146	34度 57分 43秒	134度 45分 9秒	2020年12月3日 ～2021年3月25日 (実働32日間)	694	ほ場 整備
ふくいだにいせき 福井谷遺跡	かんざきぐんふくさきちょうや ちくさ 神崎郡福崎町八千種 あざふくいだに 字福井谷	28443	410062	34度 55分 47秒	134度 47分 34秒	1999年 6月7日～9月30日	320	ほ場 整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長野多イ谷遺跡	集落 生産	江戸	落ち込み、土坑 溝、暗渠	土師器 須恵器 製塩土器	
福井谷遺跡	集落 生産 祭祀	奈良		須恵器、鷦尾 土馬、人形、 仏像、曲物	

2023年3月22日発行

福崎町埋蔵文化財調査報告29

長野多イ谷遺跡

—高岡・福田地区ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—

福井谷遺跡I

編集発行 福崎町教育委員会
〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1
印 刷 クリヤ印刷所

